川物楼

眼和四十二年十二月一日竟行 (群二十六)是眼和四十二年十二月一日竟行 (群月)一日竟行 (群月)二十五日 即 刷



No. 26

はたらくうた特集

十一月号

川柳塔十一月号目次

今月のことばと句帖中 島 生 々 庵…(1)
川 柳 塔 (同人作品)中島生々庵選…(2	
近 詠麻 生 葭 乃…(27	
川傍柳初篇研究… (53)	
前田喜代人・ 岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄	
川端 柳風・故高須亜三味・丸 十府・岡田 甫	
近 作 柳 樽川 村 好 郎 選…(28)
秀 句 鑑 賞…(前月号から)後 藤 梅 志…(18)
盲目抄の作品を味わつて森 下 冬 青…(26)
はたらくうた(同人特集)(20)
好 郎・九呂平・明 朗・千 棺・トメ子・英 子	
好 祐・光 郎・みのる・湖 平・多蘭子	
盲 目 抄高 鷺 亜 鈍…(42	
豆秋句集「ふるさと」雑感 直 原 七 面 山…(42	
時事吟否定への疑問 山 添 眉 水…(43	
ちーは一花会…(大陸巷談)東 野 大 八…(38	
古川柳における上方的要素阿 達 義 雄…(40	
川柳塔賞の名花二輪 ・・・・・・・・・・・・・・吉 岡 美 房・・・(37	
大万川柳「復活」…入選発表清 水 白 柳 選…(48)
川柳医家関ケ原へ出陣 ・・・・・・・・・・ 不 二 田 一 三 夫・・・(44)
秀句鑑賞に出た作家群)
だしじゃこの味吉 田 木 車…(58)
雅号ぶつちやけばなし)
米子川柳大会石坂新雪…(58	
初 歩 教 室 菊 沢 小 松 園…(46)
柳 界 展 望(第 風)(52)
本 杜 十 月 句 会(庸 佑)(54	
各 地 柳 壇(文 秋)(59)
文 化)
一 始 果 灯 思	
「ブローチ」新川博也選…(51)



★ 編集後記

(白柳・一三夫)

題字。中島生々庵表紙 直原玉書

今月のことば

私には近頃騒々しい場所や煩わしい事柄を避 的のさだめと観念はしてみても所詮孤独とは の人生も結局自分だけがたよりである。 も一人、死ぬ時も一人、その始めと終りの間 達凡々人には縁の遠い方々である。生れる時 暦の面壁坐禅、こうした孤独の意義を探究し に庵を結び、或は阿闍梨の深山苦行、或は遠 返えりの道は寧ろ煩雑の坩堝に飛び込んでゆ ける傾向がある。これが老化現象とすれば若 ◎おいおい老年という域に近づいたせいか、 た人達は昔から沢山あった。然しこれらは私 く気構えこそが必要である。浮世離れて奥山

耐えられぬ寂しさである。

ると思う。心すべき事どもなり。 しかし静寂の場だけでしか川柳が生れないと ◎作句する場で周囲の動揺は勿論邪魔になる 会場での席題作句にも稍々共通した点が言え メモする句にこそ珠玉が生れがちである。句 り怠慢にも通じる。忙しい職場の汗の中から すればそれは川柳人としての老化現象でもあ



中 島 生 Þ 庵

総

入

れ

歯

はずし

て手鏡

大

真

面

目

入 れ

歯

は

ずしちん

ま

り

母

を

思

6

出

L

٤

う

٤

う

俺

\$

規

格

品

な

3

総

入

れ

歯

老

妻

が

先

輩

顔

0

総

入

れ

歯

身

体

髪

膚

申

訳

な

()

総入

れ

歯

塔 月 柳



竹原市 Ш 内 静 水

知る人ぞ知るよろとびを妻と分け 迷惑な何やら子供に握らされ おむすびの丸にただよう人間味

診察を待つ間へ喋るのが一人 仔犬チョロチョロおろかな僕についてくる

大阪市 Œ 本 水 客

全快のあすがあるからリンゴむく

薬屋で相談してみるほどのこと あと味の悪さ造花の音に似る

煙突もぬれれば秋の色になる 人生へ自分で幕を引いてみて

限界が来たとは野暮な負け惜しみ 富田林市]1] 端 東

> 雲 楼

干し竿をようおつことす二階借り

ンションが景になるのも帝塚山 いしそうな雲が浮いてる秋の空

見せかけの好意ありがたそうに受け ライバルの落目人ごととはいえず

要望にお応えしてとは厚かまし 台風へ去年も打つた釘のあと

せわしうてたまらぬように赤トンボ 倉敷市 本

田

恵

朗

スイッチで神棚灯す三代目 ママポリス価千金の笑くぼ持ち

半可通同士ピントがはずれあい

西陣の裏があるからある表

後

藤 梅

志

島 生 Þ 庵 選

中

負けておくことが勝つよりらくに見え

んくつにされそれっ切り来なくなり

藤 甲

青森市

女房と秋刀魚仲よく秋深む 生を母は道具に甘んじる

先代にすまなく山が禿げてくる 過ぎたるは及ばざりけりアイシャドー

筵旗済めばおしやもじ坐り込み

高石市 沢 好

祐

苦情より煙草が効いた汲取屋 幸せは孫の撃つたび死んでやり

建増してまで民宿の夏稼ぐ 若狭高浜

岸和田市 内 藤

3

波長合わぬままに銀婚式となり

氷屋も秋の残暑へ疲れ出し 枝豆とこおろぎが居る台所

うとまれて悲鳴もあげずついてゆき

婿さんをどう呼びましようお父さん 五十でもやつぱり末つ子甘えはる 倉吉市

谷

弘

朗

親心足らないままの荷をかざり

道遠し裏切る人も中に居て 夕焼の色に譜をふる作曲

何気ない好意に目頭熱くなり

岡山県

直

原

七

面 Ш

弁解をしない男の強い愛

乳首噛まれて女体崩れぬ

大阪市

Ш

JII

阿

茶

ナイターへ月も写して秋となり

養老の滝

孝行の水を父親酒と飲み 落伍せぬ汗を木蔭でそつと入れ

関ケ原

雨ざらし見世物になる武将たち 豊中市

寺

田

花

宵

旅先でパーマネントの型を変え

思い出の季節は花におしえられ 思い出はグラジオラスを抱いて逝き

島根県

湯上りに丁度風鈴鳴りはじめ

喫煙の灰皿ほとりまみれて居

前例がないと役所はそれで済み

井 明 朗

米値上げここぞと値上げ押寄せる

藤

浜 野 奇 童

岡山県

裁決へ無口ゆつくり手を挙げる 前任の分まで一しよに叱られる

何で肚立つのか女つんとする その話後にまわせと酒が出る

服 部 + 九 平.

戸籍吏もほんとのことは知つており 岡山市

崖下に清水が湧いて地価をあげ

夜のしじま明日は煮られる貝の私語

絶景がまたトンネルにちよん切られ

孫とふたり夕餉貧しきトマトの朱

尼崎市

長

谷

111

Ξ

司

昼寝からさめても用のない老夫婦 蒸しタオル遊びに馴れた手に受ける

すしうましあがり湯吞に梅里の名

岡山県 H 村 藤

波

炎天のヒマワリ真昼を笑つとり

其の中の餓鬼大将を蜂がさし よそさんの所得をきいて何になる

宿命をかこつ養老院の月

ハワイ 輪 峰

円

月花に扇かざして青葉城 仙台晩翠の碑

山寺にて

蟬塚に翁の声も泌みこんで

赤倉温泉途上

最上川紅葉に冴ゆる水の音 蔵王温泉

リフト二基遥かな空へ冬構え

実弟の新築落成式に寄せて

関市

玉

弘

半

休

凡商のコツコツ蟻の塔築く

明治百年祭に想う

明治百年湖底の村へ釣を垂れ

外孫誕生

育児法蛙は蛙の子に育ち 宮参り宮の空気を吸う寝息

京都市 都

求

女

ボロ蚊帳を干すよにバッテイング練習場 倉

お見舞をするほうに台風針路まげ 絶対にすくえぬ紙へ金魚逃げ

機関車へ蟬がはげます上り坂

JII 的

京都市

松

台風のそれたニュースへ爪を切る

この街の歴史へ変らぬもの緑 車窓這う雨滴にも戦いがある 箸紙集め当のない旅が好き

ハワイ 築 Щ 快 夢

入歯まではずしくつろぐ二号邸 ハワイから今浦島を富士迎え

子の出世肩身の広い親となり おおこれぞ父母の国夢の国

捨猫とうなだれがちの向日葵と 太陽の雫が落ちて曼珠沙華

大阪市

橘

高

薫

風

悼 水谷鮎美氏 同期の桜

酒に爛れてしまいけり

風のない浄土へ帰る心の灯

視察団あとのまつりを見て廻り

大阪市

本

多

柳

志

旅中にて

薫酒山門に立てば気になる蟬が鳴き 何事ぞ朝湯の中の政治論

ミス海女はカメラを意識してくぐり

大阪市 金 井 文

秋

退職

起

大阪市

不二

田

Ξ 夫 底冷えも知らず熱帯魚は平和 定年で明治の最後社を追われ タレントの都合死なせて役を解き 我が道を行くのに人気邪魔になり

家元の目に酒ぐせが惜しまれる お尻いつぱい画面に見せて塩つかむ ヨロガワノミル ステンショで年が知れ

席

相方に不遇で芸がすさみだし

萩が咲く山を無残なブルドー 深夜放送妻の寝顔へ音を下げ ザ 使うほど良くなる脳の話し聴く

大阪市

大

坂

形

水

高槻市 傍 島 静

馬

宿題を委し安らかな子の寝息 今日の悔い日記してからよく眠れ サングラスとればおぼこい顔してる

芦屋市 丸 111 初 甫

告白のムードにまんまと月が出る 大手術明日に控えた不整脈 のその後を訪えば布団干し

鳥取市 河 村 日 満

連れ出して妻の奢りの中ジョッキ

内職の妻にゆずつた扇風機

じじばばにどうやらなれるいい便り 二女よりの便りで

藤井寺市 西 わ

を

岡山県 浜 田 久 米 雄 手も足もバラバラになれ蠅叩き 折目正しく口上の結納金 溜池の鮒跳躍の夢を持ち

いつまでも目なしだるまのままで過ぎ 白墨で悲しい事故の線ができ

払い出す顔と銀行見抜いとり

大阪市 西 出 栄

妊娠を公開するよに妊婦服 葱坊主早く嫁げと云う如し

マダムの眼力次のパトロン物色中

高槻市 若

柳

潮

花

弟子に気を取られて一と間はずしてい

口説かれたことも男の耳に入れ お隣りもテレスで鳴かすきりぎりす

名古屋市 田 水 車.

年甲斐もなく口笛吹いて出かけたり

腹見せたボートの上を赤トンボ

骨立てたまま天国へゆくか君 豆秋君の霊に捧ぐ

八月八日郷里津山へ墓参 (三句)

門真市

福

島

鉄

児

墓掃除いずれお世話になる

も僕 草いきれ中の仏に迎えられ

来年の再会約し合掌す

風鈴の伴奏がよい冷奴

下関市

桜

JII

不

水

ミニスカートもう仙人も落つこちず

奥さまの留守をシックなお手伝い

六十の恋は背中に話しかけ

京都府

大

鶴

喜

由

若者に毒な唄だとつい覚え 台風は来らず損をした思い

有りったけの芸披露して孫帰る

神戸市

仲

どん

たく

ねだる時 禿具合三面鏡に教えられ 娘 女の顔になり

出雲市 尼 緑 之

助

望なきにあらずと妻は瞳を細め 明治百年今浦島も出そうなり 頼りない合い槌ちやともいわず 精進の花音たてて陽に開く 再停年旧婚旅行の秋の空 還暦の峠まだまだ山がある 男なんか用おまへんと稼ぎに出 それも性分静かに批難してきはる 旱天の雨は小言もいわず濡れ 喬木になる木が鉢でいじめられ 申訳なさそに降つた二十日振り 退職金額を銀行家に教えられ せつかちな僕に仲人頼みに来 こんりんざい他人の世話などせんときめ 竹谷文一先生無形文化財に指定を祝いて 日テレビ相撲へみんな寄り 独 仙氏 西宮市 八代市 倉敷市 豊中市 大阪市 戸 佐 木 水 若 村 田 谷 林 野 長 古 竹 草 1 = 郎 方 荘: 右 占 吊り皮の一つへ夫婦の手がゆれる 金のない休みひげそる気になれず 呼捨てにしてと新婚甘えられ 残暑きびしくデパートは冬仕度 ジャイアンツ負けたぐらいで酒をのみ 発育をほめられて買う台秤 人事と見過し出来ぬお人好し 配転の減収妻の手にゆだねんか コンマーつ間違えておく五つ玉 とどかないとこでとんぼは腰をすえ 社内預金一円もなく皆動し 無器用な指ピンカールもて余し バックボーンかどとれぬ子がたのもしく 位牌は古くなれど涙は新しく 初恋が未亡人だから寄つて見る 以下次号なんて次のも買わせる気 雰囲気がいいとコーヒーだけの客 横浜市 大阪市 笠岡市 熊本市 楠 児 松 菱 野 島 本 田 E 与 満 英 鵜 忠 呂

子

汀

秋

志

娘の墓で恋人だつた人と会う

兵庫県 河 原 3 0 る

一ニイ三ンで死にたい希い老夫婦

台風が予報へ義理をたてに来る 終戦記念の日に

この雑草を喰みしおもいの手を休め

兵庫県 大 江

秋

月

部長課長の順に列軍を降りて来る

窓の子に駅長敬礼返しとく 鈴虫の声もホームで聞ける駅

伊丹市 小 JI] 静 観 堂

丑の日がすんで鰻は息をつき あの妓の名忘れてしもた五十年

扇風機風鈴の風に憮然たり

奈良市 宮

笛

生

ハイヒールぬいでゆるゆる岩伝い

鬼ガ城

生きている魚が寝返りうつていた

勝浦魚市場

もう一度温泉入つて旅館発ち

大阪市 福 井 野 迷

路

黙とる稽古むつかし四十年

腿強くひねつて笑いかみ殺す 人生を観るそれは先ず目をつぶる

大阪市

宮 尾

あ

1

き

くつわ虫あんまり鳴いて嫌われる もろて欲し猫は可愛いい猫と書き とっそりとつけた香水よく匂い

香川県

Ξ

井

酔

愛玩犬を飼う(一句)

背のびして生きる私につきまとい

あほくさと晶子のうたを一笑し 四十のくすぶる焰何とする

鳥取県

森

田

布

堂

見切品手垢をつけて売れ残り カマボコの板も当然値上げされ

のへのの顔は雀と顔なじみ 大阪市

室

谷

鉄

舟

雨降つて悔だけ残る水喧嘩 パママと呼ばせてパパの無精髭

阿波おどり見物

阿波に来て俺も阿呆になる一人

小

畠 無

聖

夫婦喧嘩カメラを向ける子に苦笑	楯までは売つとりゃすまい釜ケ崎	岡山県藤	ゴシップも立たなくなってドサ回わり	調整中のまんま役所の大時計	時計屋で本当の時間聞いており	守口市 村	何時来ても便りは貧の愚痴ばかり	いい嫁が来んぞ百姓止めんさい	ヘソ曲り台風にもあり気をもませ	岡山県池	炎天へ出たがミミズの命とり	早抜六十日	半冷えのビール冷蔵庫もつかれ	母ちやんの作つた米をつめてくれ	愛媛県 村 -	見せる気のミニスカートが席譲り	何もかも忘れてみたい俺は下戸	梅里師の詩聖となつた日がかなし	鳥取市 藤	夕やけへボートが腹を向けて秋	割り箸を割つてもらつて嬉しがり	感嘆詞前後に聞いて裾模様
		原				田				田					上				本			
		秋				瓢				古					旭				礎			
		月				太				心					童				Щ			
同じ物喰つて女房のよく肥り	泉佐野市	お銚子を逆さに振つてまだ酔えず	夕焼ける空に草笛父と子と	ちつばけな窓にでつかい空がある	奈良市	楽の日の衣装のままの恋つづく	ヒロインになつたつもりの恋が逃げ	手ざわりのそれぞれ個性ある白地	東大阪市・	核心を外され煙草の火も消える	すれ違い迎えに濡れる迎え傘	朝顔の蕾に明日ある陽が沈む	大阪市・	台風の洗礼うけて空が澄み	調子よい話にのつて借りられる	定年へ人間ドツクを予約する	倉敷市 昭	明治色四十五年のいぶし銀	解決のムード双方明治調	此の辺で腰が折れそう課長補佐	愛媛県	混浴のようにフェリーに乗つており
	大				村				久业				中				野田				渡	
					上				米				JII								辺	
	I.								奈								來					
	工睦				春				奈良				滋				素身				暁	

笠岡市	まだあがりますよと強いことを云い	値上りへ給料だけがほつとかれ	板塀にピンを越して当選し	岡山県	特ダネを表紙に競う週刊誌	割勘でノルマを越した二日酔	鬼と云う異名と別にある涙	堺市	実績があるので消極的になり	うしろから見れば女に大差なし	足の爪まで切つて見合の席へ出る	竹原市	煙草屋にバアさんが居て素通りし	ルバ	憤懣がスピード違反に引つかかり	和歌山市	切れる糸で鰻釣つてる釣らせてる	税務署が新装なつて活気づき	おせつかいの妻が孤独の邪魔になり	大阪市	しぶ面の笑顔は物を問いに来る	間の悪い太鼓踊りをもつれさせ
木				横				新				小				野				福		
Ш				Щ				谷				島				村				井		
遠								笑				蘭				太茂				多蘭		
_				声				痴				幸				注				剛子		
												(32)				2.5						
嫁るまでは他人であつたこと忘れ	船測の波も手拍子とる大漁	諫早市	あのひとを呼ぶ山彦でこと足りる	実を付けて枝に誇りのある重さ	電話口何番さんで売る団地	倉敷市	妻だけに俺の頑固が許される	この肩にこの手に一家ぶら下り	母親に通訳させてねだられる	笠岡市	隠退の心のゆとり花を生け	V.	雷が家の電灯けして去に	ハワイ	仲裁がうるさく早い仲なおり	里帰えり故里は水上艀の娘	爪染めた手で鈴虫に餌をやり	和歌山市	サヨナラのお二人デツキをこぼれそう	目を見つめ語る貴重な五分間	白柳、小松園氏と三原駅ホームにて	新涼の途端に咲いて居た野菊
		JII				水				木				上				西	う			
		岡				粉				Щ				田				尾				
		霊眼			3	Ŧ				要				紅				公				
		子				翁				次				溪				作				

背信の目にとびりつく空の青 被爆史に逆らうようにビルが建ち 井。 Ŀ 旭 峯 パン食に代えればパンの値が上り パパママと呼んで孝行など知らず 集金と支払同じ日で悲し 沢 \mathbb{H}

倖せの中に魚拓の紙を撰り 守銭奴が美談を生んで死期近し

住所録今年も友の無事願う

大阪市

森

本

良

夫

定年退職の友

言葉より双方握手に力入れ

わが身にもやがては受ける辞令見る

大阪市

今

西

章

雅

寝室のカーテン変える子なき妻

責任を遺憾で済ます大臣業 木綿豆腐布目出るまで絞られる

大阪市 西 111

さよならをさらりと云つて恋終る 折詰に言訳させて服を脱ぎ

朝顔も残りの夏の風情見せ

ブル ル 加 JII 力 口 女

気配だけ感じ合ってる年となり 千鳥足ポチは驚き道をよけ

だんまりがせい一ぱいの反抗か 熊本県

満 銀 風

お手本のように汚職の記事つづき

海汚れ貝になりたい夢も消え も一つの顔見せて欲し女店員 代市

平.

八

娘の料理薬剤士にぞさも似 干上つた田に台風は遠く居る たり ワイ

羽

佐

間

柳

葉

家計簿にずんと響いたストライキ 教養の有無と蓄財別だっ た

富田林市

岩

田

美

代

ハンサムな彼が私をつかれさせ

班癒えぬプライドつたわるパール買う 虚しさがすがすがしく胸にみち

大阪市

市

場

没

食 子

嘱託として定年後まだ飼われ 孫の写真定期に入れてご出動

妻の歯はまだ脱けたまま子沢山 加賀市 那

谷

光

郎

宿浴衣ライバルに会つた土産店

西 辻 竹 青

奈良県

相愛が別れてしもたも金のこと 鳥取市 法 泉 子 稲熟れるにおい農夫の鎌はずむ 平田市 久 家 代

残暑きびし月まで焼けた月で出る 森 本

森繁が云うので胃薬のんでみる

呉

市 光

林 野 甦

音楽の効果不気味な夜にする 一生の事だと妻から娘に教え

大阪市 石 倉 旅 風

風鈴のチチチリチンは秋の音 瀬戸ものの蟇も汗噴く盆の昼

松江市 柳 楽 鶴 丸

辞世の歌タンスの底で二十二年 二度目から平気で買える避妊薬

美禰市 安 平 次 弘 道

七草も知らずに秋のモード追う 細胞が単純邪教のカモにされ

熊本市

岡

本

昭

=

実物はもつと良いぞと言う見本 さんま焼く友は二級でことがたり

鳥取県 清 水 保

タクアンのおいしい秋が好きであり

台風へ今年も無条件降伏し 精一杯余命を鳴いて蟬の夏

> 振袖とミニが同居する日本 福岡県

> > 太

田

湖

平

仕

男

膝貸して耳搔いた子が妻娶る メンデルへ醜婦の負目孫にまで

着せかえの人形へおませなひとり言 今一度立直らせる謎をかけ

東大阪市

本

多

清

婚礼へ前科を知つてる顔もあり

有

働

芳

仙

竹原市 杉 原

愛

鳩

分けてやった暖簾の方がよくはやり

汗の肌押しつけバスの娘はばからず 夕涼み兼ねて農夫は田をまわり

高槻市 Ш

積乱雲下界のことは考えず

雨蛙夕立が来てホットする

季

賛

女房のロマンチツクについてけず 泉大津市 高 津 徹 也

今治市 越 智 水

来年は卒業という夏の恋

	我理にする奉賀帳の字がふるい ・	晩年がよいと易者が言うたけど 姫茸市 隠一岐 一才一番	支	大阪市 河 井 庸 佑	一息にのんでお冷の礼を云い 奥さんに智慧を貸したらのろけられ	大阪市 川 口 弘 生	権力に知性しかれて不甲斐なさ	セツトした顔でお帰り待ちわびる	大阪市 宮 地 双 楽	どちらへも解つた解つたの仲裁し	残りもの食べても肥る身のつらさ	和歌山市 土 谷 城 石	真心を鉛筆の走り書きに見せ	洗濯をして秋空は見まわされ	岡山県大森娯句楽	釣遊びかるく釣られている浴衣	日和山海岸にて
台風がそれて残暑へ愚痴なこと小松市	セールスの結局「人格」やと悟り残暑厳し玉葱蒔くのを忘れてた	タイミンク悪し 分割 歴史 日子 と	スイミノが長い乙炎をが与らけ 肩書の割にはスカツとせんタイプ 宝墳市	遺族の見栄金より花輪にして貰い	盆踊りここでも明治は遠くなり字部市	旅はよし浅間の山のちぎれ雲	ハイヒール五十の坂を意識する	守口市	場の空気だまつて居るのが得と知り	もの忘れしたよに笑わぬ老夫婦	笠岡市	振り向かす魅力も持たぬ小石我	朝参り骨のずいまで清められ	大阪市	エエトコを注射ですよに起される	向うから戸が開くような運に乗り	善通寺市
関		遠	Ц	1	平			羽			出			天			岡
戸		Ш	木		田			原			原			正			田
宗		可	V,		実			静			真			干			拳
太郎		住	3		男			歩			奇			梢			法
17()		II.		-)			9						113			45.6

7 ニア程薬集めて医者を変え

高 崎 雄 声

頭打つて棚の存在知らされる

堺 市

蟬鳴いてやたらに郷愁かきたてる

罰金を納めて礼を云う引け目 松江市 中 JII 晃

男

会うた目をあわてて伏せて君思う

磹

弓

彦

案内に坂はなかつた分譲地

智能指数判る化粧と乗り合せ 愛媛県

近

藤

凡

生

喰わなきや喰われる世間へ背をまるめ 日の思い出一つ白髪抜く

きし

福井市 城

大 Ш 雅

木 村 路

加賀市

咲きかけた朝顔あすの朝めざし 来年もまたこい燕に語りかけ

病室の片隅に聞く男泣き

年のブランク憎い胃を押さえ

馬 場 魚 Ш

小松市

加賀市

細

呂

木

木

仏仏と睡魔に鉦の乱れ打ち善悪のすれすれを行く現代僧

京都府

清水谷

句楽坊

宿直はこの前読んだページあけ 笑う人泣く人今日も無表情

若

本

多

久

志

よう飲まんのも居て世の中の平等さ 実印を握つて妻の座も堅し

マイカーとマイかあちやんの夢をもち

渡米準備

何時もなら寝てる六時を英会話 なさけない思いで会話のテープ聞く

菊

沢

小

松

袁

だしがらになるまで男働かされ まだ生きるつもりの顔を敬老日 しん気くさい恋だとおもうすだれごし ほどほどにしとけば笑い声絶えず 聞えてたのかタクシーきつちり止めてくれ

清

水 白 柳

道聞けば女ひとりは身構える ベールを脱ぐは自分だけの部屋 石垣は鈍重にして陽を吸わず

扇風器お盆の過ぎた風を出し 波紋だけ残しもぐつて行く蛙

西日本川柳大会

句碑を訪う路 赤松にむかえられ

たんすの値聞けばめでたい客にされ

秋風がシヤツター威勢よく上げる 酔うている方へ勘定まわしとき

返盃へ坐り直してるうちはよし

誕生寺梅里の分も拝んどき

西日本川柳大会

JII

好

郎

村

春 巣

賞

北

111

安楽死などはできない注射攻め

チンコ屋の全機入替え見逃さず

万歩どころか自動車で走る日がつづく けつたいな夢を見てたにもう忘れ

答弁の用語に慣れずつっこまれ

栞

西

尾

19 JII 化 第 大 文 祭

旅や旅

女の美しく

歩出ずれば然り吾旅人となる心

旅や憂しおばはん団体と乗り合せ 湯の町の坂から霧が晴れてゆき

勿体なや旅の疲れで寝てるなり

ことしも次のとおり開催いたします。 大阪文化祭の短歌・俳句・川柳大会は、 また、大会へは、どなたでも応募の有無 心者の方も気軽に作品をお寄せ下さい。 ご来場下さるようご案内いたします。

主 句

集

宛

先 切 投 席

> 句 題

各題ごとにハガキ1枚に2句ずつ 当日2題発表 (正午しめきり)

会 講

題

演 場

B

時

昭和42年11月23日

11時開場午後0時半開会

中 央

公

会

堂(3階集会室)

日本画家 融

紅

「大阪いろいろ」 青 岡 木

「地下街」

万国博

Ш

片 北

「小説」 「人形」

10日

着 限

11

月

住所・氏名・・雅号を明記

北区中之島1 大阪市教育委員会内

大阪文化祭川柳大会係

席題・兼題共優秀句に、府知事・大阪

入選句集をご希望の方は投句の際

市長・大阪府・市教育委員長から贈呈

〇〇円別送してください

大阪府・大阪市・大阪府教育委員会

催

大阪市教育委員会

15 —

称 かい

清

博

美

丸

府

井

岡

田

甫

前

田

喜

代

人

JII

端

柳

風

岡

祫

重

義

須

唖

Ξ

味

が、九月十三夜の方はふがいなくも金の都月十五夜になんとか都合をつけて出かけた関係があった。 主題句に おける 息子も八 慣によって、この両夜は切っても切れない 夜に行なわれるが、片見月を忌むという習清=吉原の月見は八月十三夜と九月十五 ふがいなさ薄を分て息子逃 日は「きく」である。 前田=「すすき」は八月十五日、九月十三 はあんまり素直か? 出した……と句面通りとりたいが、それで イノシシだ」とか何とかおどかされて逃げ 「すすきをば逃げて

夜である。次の句はすすきをよんだもの。 も菊にとつらまり」(七・31)があるし、 この息子は十三日に逃げたのでなく、十五 惣花は薄の中で渡すなり 化かされた息子芒をしょってくる 六.28

陽の節句を指示するためのものである。 知る。なお前田氏の九月十三夜は「きく」甲斐なさと評する川柳子に当時の息子観を が菊は名月に関係なく、ただ九月九日、 とし「すすきをば…!」を引用されている 岡田 =月見の紋日をはずす息子。それを不 三六 • 42 重

一 傍 九 八 一 · 25 12 38

を分けて逃げ」と表現している。 い。これを月見のすすきにかけて え約束しても、その約束を破らざるを得な 葉もしりぞけなければならない。またたと 合がつきかねる。そこで遊女のさそいの言

「すすき

なり」(一三・32)

秋の野遊びに行った息子が「そら

451

切手の入らぬ田楽ハまずい也

江

日常の生活は食事も他所へ出かけることも

などということにもなりかねない。 川端=賛。「逃げる客薄の穂にも怖ぢる

座敷牢あゝ月われを亡ぼせり 空を弐度見たが息子の落度なり 月二ツ息子太義を思ひたち

> である。 この られていた。遊女の逃亡を防ぐためのもの の外に出る時に携帯する一種の外出証明清=「切手」は遊女が抱主の許可を得て これは遊女のみならず、一般の女子も 切手がなければ廓内への出入りを禁じ 「田楽」 は真先名物の田楽。

行くものだが主題句における田楽は、客が切手を見せて田楽を喰に行き 二三・40 ①遊女の場合はいわゆる籠の鳥の身の上、 るということも覚えておく必要があろう。 の頃に活躍した狂歌師、 であろう。 持ち込まれた田楽はうまくない、という意 土産物として廓に持ち込み遊女達にふるま行くものだが主題句における田楽は、客が 出て喰いに行くからこそうまいのであって っているのであろう。しかし田楽は、 藤井―田楽を喰う人により解が二つある 尚、この句は句解とは別に天明 朱楽菅江の作であ

れる。 の意ではなかろうか。遊客の田楽観と思わ みの田楽」とでなく、一般の田楽よりもと の言と思う。礎稿のように「廓内に持ち込 外で真先名物の田楽を女連中と一諸に箸を ②遊客の場合、 として名物の田楽を喰う味こそ最上である 出来ない。 この味こそ一串千金とうそぶく粋客 切手を持って廓外へ出て自由人 切手を持って遊女をつれ廓

った。 田楽よりも、外に出て食べる方が気分もは 出入御屋舗之方にて無相違請合申候 前田―切手茶屋(切手見世)は五十軒あ 切手には次のことが書かれた。

川端二礎稿に賛。

客の持ち込んだ土産の

切手見世

おせるのでの意で「まずいなり」は遊女の 意は礎稿の通りであるが、田楽は客が持参 たのではなくて廓内の仕出し屋から取り 何屋何兵衛

傍柳の関係は明らか。 々頭の岡田先生の解説をみれば、菅江と川 岡崎=|賛。なお「初代川柳選句集」上巻

ほとんどない。その代り、年に一度ぐらい 丸 二客の土産でも仕出しからとったも 岡田―客が遊女をつれて外出することは 籠の中で食べてはまずい筈。 ŏ

妓楼主の月行事が与えたもの。 二軒だけが取扱った。廓内の女の外出には に必要な切手は吉原大門の外の五十軒茶屋 せることはあったのである。なお女の出入 の全部が与えたものでなく、その内の 稀に、楼主が許可して鄭外ハイキングをさ _

452 いちっこを御用笑ッてしかられる

狐

なる。 う。その動作が御用など幼いものにはおか 梓の木で作った弓の絃を叩きながら、 じめにやっている大人から叱られることに しくてならない。それを笑ったためにきま せまたは神降しということをして吉凶を占 ――「いちっこ」は市子で梓巫女の異称 口寄

う事にはまた器用で、巧みに口寄せの口真 と真剣になっている連中に叱られるわけ。 似をするので「梓弓近い他人が鼻をかみ」 高須 岡田二同。 丸=賛。動作や唱え言を笑うのである。 (三御用聞きなどというもの、そうい

453 百旦那もくせい折て叱られる Ξ 朝

寺のもくせいの木を折って叱られる。百旦 那が馬鹿にされているのを表現した句。 枝折らせましょう」というのに百旦那は 高須=大旦那になら「いい匂ひでしょう か布施を出さない百旦那、うっかりと ==盆暮あるいは葬儀法要の場合に百文

> うところで現われる。 叱りつける。 丸=-賛。寺の境内には、 日頃のお布施の違いがこうい たい ていもくせ

いが植えてあるから、 引っときを着ておがくずをよびに出る この句が生きてくる

454

長屋風景とみる。 よそよりいっち早い所で、本所深川 の住民、下水のはけもわるく蚊の出るのも 出しておがくずをくれと呼びかけた裏長屋 って裸に引っ解きをひっかぶって表へ飛び おがくずは安直な蚊いぶしに使われた。従 からには裏長屋の住民で貧乏人でもある。 れ夏は引っ解いて単衣として寒暑をしのぐ 引っ解で居るのに座頭通ふ也 藤井―引っ解は綿ぬきの衣、冬は綿を入 辺の裏 七 15

歩きし 高須=一賛。 (玉·15) 「引っときを着て鼠の巣もち

29 清=「おが屑を升で商ふ暑いこと」

丸 賛。

済を求めて座頭が来ること。「鼠の巣」は 引用句は し業の座頭から借金した貧乏人の家へ、返 から付言すれば、「座頭通ふなり」は金貸 大掃除でよごれていいようなものを着てい 岡田— 同 初心の方には句解に苦しみそうだ (余計なことながら、諸氏の

前 月 号 から…

:

盆踊り裸デンキを月と見て

う祈りにも似たもので、 つづみに似ているといって、面白がった。 そうした粗野なものから、現今の盆踊りが である。その音が、 明治の頃の盆踊りは、農村の、 遠くから聞くと狸の腹 樽の底をたたいたも 豊作をねご

的だ。昔の盆踊りとは、似ても似つかぬがこ コリの立つ中で踊るのである。すこぶる情熱 きな裸デンキを吊る。スピーカーが鳴る。ホ はじまり、夏の風物詩となった。 も、庶民のもつ胎動と云えよう。 この句も飾りつけなしである。 今の盆踊りは、丸太で櫓を作り、中央に大

鈴の二度ほど鳴ってそれっきり (きさ子)

く考えさせる、技巧がひそんで居る。 分を出し過ぎたきらいがある。その中でこの 風のない日のいらだたしさ、無気味な静寂 枯淡な句である。 鈴の句は、しばしばお目にかかるが、気 切れ離れがよく、自然というものをよ

後 藤 梅

い人は、少しばかり風の路を外らして吊る。 思う。そうした一瞬が、この句である。 さは、風鈴に、鼠でも飛びついたのかとも、 家のまわりには、風のみちというものがあ それを離れると風鈴は鳴らぬ。要領のい

碁仇と来た沖釣りの負けられず

こんなこともちゃんと計算に入れて、作句を はしらず興趣をそそる。年功というものは、 らの対照が、音読するとはっきりして、 韻がつよく、「沖釣り」はやわらかだ。これの上のうま味がある。すなわち、「碁仇」はわけではないが、この句には、不思議な音韻 景。なかなかおもしろい。べつに碁仇に限る 碁仇がいて、 わざと わざを競い合ってる 情 起こしそうに思えるが、この句は、船の中に 沖釣りはよく、船と船との間に、競争心を

やり直す人生額の位置も替え

と平俗な用語を当てはめたのは、手腕。 人生を再出発することを「やり直す人生」

> 者のもつ技巧であろう。 の見えている如く感じさせるのは、これも作 いる。なんとなくその人の人生に、希望がほ 再出発に当ってまず、額の位置を替えよう 以下「額の位置もかえ」を浮き上がらせて

が見えて、好感がもてる。 とするのは、並々ならぬその人の覚悟のほど

勿体なし月をひとりのものとして

来る人はすくない。珍重してよい句だ。 ても、きれいな月を、心から拝することの出 にも似た心持ちで、座って居るのであろう。 占めしているようで相済まぬと、素直だ。 のではないのだが、この作者は、自分が一人 果てから果てまであり、穴勝ち一人だけのも るような気がする。月を見る人は、世の中の この句を見ると、この作者の純真さが分か ああいい月だといって、観賞する人はあっ 思うに、作者は月光の下に、敬虔な、祈り

お隣りのテントカレーが好きらしい

であるが)鼻をヒコヒコさせて「ああシマッあろう。(蒜山高原の名物はジンギスカン鍋 を見合わせた瞬間のシーンが、目に見えるよ タ、こちらもカレーにすればよかった」と顔 レーライスの匂いが忘れられなかったもので ぬものか。この句は、強れつな、あの時のカ 印象にのこった情景はいつまでも忘れられ蒜山高原(湯原温泉)にて。とある。

川柳は、こうした瞬間のものが句になる。

想像され、共感がもてる。 のひえびえとした空気や、団らんの有様まで そのいい例である。場所が場所だけに、周囲

長かった短かかったと夏休み

子。それぞれに先生をとりかこむが。 とった者、やせっぴい。貧しい子、恵まれた まっ黒になって先生の許へ集まってくる。ふ 九月一日は、小学校の登校日である。

中には、全生徒の生活がはいっている筈だ。 いつくしむ心が変ってはこまる。その答えの は、教諭と名前がかわったようだが、生徒を であろうか。興味がもたれる。ひと頃の訓導 と「短かかった」と答えるものが出来た。 の問いに対して。「長かった」と答えるもの どうしてという先生に、生徒はどう答えた 「どうだ夏休みは長かったか」という先生

わが影の離れともないいじらしさ

読、ひんやりしたものを感じた。 つねに自分自身についてまわる

一と七日ほこり払う水もまき 大阪市

雨

内職のかたわらでお経を読み

哀しみのうち天寿という笑顔 お地蔵さん時の移りの排気ガス 山上 太

郎

としたことであろう。 もない風情があるように感じた。これはなん さそうだが。作者は、いじらしくも、離れと もので。これに格別考慮をはらう余地は、

わが影までも、慕わしくなるものか。 人が、ながく孤独の生活に堪えていると、

る、 であろう。やがて作者は、影の中に立ってい じることができる。しかしこれは一瞬のもの が。人間の、孤独な人の、悲痛な叫びとも感 この句を、一つの詩と感ずることも出来る 自分自身を見出すにちがいない。

造り物やないぞとラクダまばたきし

が「まばたき」をした。いる。まるで造り物みたいだが、そのラクダが「まばたき」をした。 くちのまわりを甞めたりする。大陸のサバク たままだ。時々ながい舌を出して、ペロペロ いラクダは、一向無関心である。つねに立っ 珍らしげな人の目を集めているが、背のたか 動物園のラクダは、みなから愛されて、物

たくまぬ叙景が、この句を面白くした。 作者は、そのまばたきを見逃さなかった。

ろを、恋をそそのかすかのように感じた。 月頃に咲いた花は、うす緑だが、四五回かわ 女王の如き観があるが、作者は、この花のい り、紫や、ときいろがかってくる。花の中の る。あじさいのいろは複雑だ。最初、七、八 あじさいが咲くと、庭がパッとあかるくな そそのかすようにあじさい色を変え

> いの如く色を変え、小野を誘惑した。佳句。 子に合わすフルーツポンチ秋近し 漱石の「虞美人草」でも、藤尾は、あじさ

もり上って、作者の成長を感じる。 子供向きのもの。あまい香りがする。 ドウの中で見るだけで、食べたことはないが た。というだけの句だが、なんとなく情感が 子供連れの一日、子供さんのお附合いをし 喫茶店のフルーツポンチは、 「秋近し」がよく利いたかんじで、暑い夏 ショーウイン

ももう、おわりそうな感がしみじみする。 うちの戸を作るひまない建具職

う。この句、仕立て方が凡庸でない。 ない。室内、調度が洋式になったせいだろ よく利いている。建具屋さんは、大阪の市中 では専業化し、小物を扱う建具屋さんは数少 この句と同じ内容の句はたくさんある。 しかし、この句は、「建具職」がまことに この句に、なにも附け加えることはないが

星空のどこかへ僕がはまりそう

なった、記憶がある。 見上げていると、スーと吸い上げられそうに は、秋の夜でなくとも、目がくらむようだ。 夜のそらを、いちめんにチリバメタ星の数

門化した川柳作家の、追随し能わぬ作句力を 示した。なんど読んでも飽きない。 「星空のどこかへ僕がはまりそう」とは、 童心をたくましく、素直に表現し。専

はたらく うた



フーテン族に云わせると、はたらく人間なんて、動物的で最低だそうな。どエライ世の中になつたものである。
はたらけど はたらけど……と、啄木は、じつと手を見る。
豆秋さんは
啄木でなけれどシッと手を見るよ
啄木でなけれどシッと手を見るよ
啄木でなけれどシッと手を見るよ
なかむしれなが、豆秋さんはパチンコの親指を見
とよんだが、豆秋さんはパチンコの親指を見
とよんだが、豆秋さんはパチンコの親指を見
とよんだが、豆秋さんはパチンコの親指を見
とよんだが、豆秋さんはパチンコの親指を見
とよんだが、豆秋さんはパチンコの親指を見
とよんだが、豆秋さんを嘆かせたが、はたらくと問
なかしむかし稼げば楽になりしとか
ことは素晴らしいことである。



≪談へ経理部長がまた呼ばれる案へ課長そうかと云っただけ気苦労を知りつつ課長��りつけ

会社員

111

村

好

郎

萎まずに生き延びているのがせめてもの慰め 表まずに生き延びているのがせめてもの慰め でとしまではゆかないが、まあ枯れず までどんな課題が出てもすぐ金融、銀行に結ら でどんな課題が出てもすぐ金融、銀行に結びつく句が頭にひらめき、そんなに苦労して びつく句が頭にひらめき、そんなに苦労して でとれな課題が出てもすぐ金融、銀行に結びでとんな課題が出てもすぐ金融、銀行に結め でとんな課題が出てもすぐ金融、銀行に結びつく句が頭にひらめき、そんなに苦労して いるのかと思う。

— 20 —



失っては終りである。

何なる地位でどんな場所で働いても自分を見

のと確信している。

郊外に来てもこせこせ歩く妻 張りつめた気が玄関に来て泣ける 野良犬にしっぽふられた失意の日 妻だけの胸にしまっているカルテ 節で道楽したと知る弾き手

職 中 村 九 呂 T.

らどんなことになるだろう。軽べつもし笑い れなりに働いている、愉快なことだと思う。 ていてこそ尊く有難い物だと鄭重される、 ものにされる。座布団は座布団の勤めを果し 共の上に乗ってやると頭の上へ乗ったとした れる、ところが不心得にも今日はひとつ人間 らせていてやると思えば誇りがましく感ぜら ことだと思っていることだ、人間様を柔く坐 座布団は一生人の尻に敷かれて終る。有難い 人間は人間なりに、茶碗、下駄靴等々もそ

> 衛生講話ねずみのとこで笑いが出 決算の監査口下手あやしまれ 貧乏性日曜じっとして居れず 月給日電話の声は妻だった

うれしい多忙停退閑にせず **驚いている。在職中職業柄、便所消毒、** 昨年停退した。意外に職場の句が少いのには が、よいくせがついて喜んでいる。最近は団 のうじ共を採取して薬をつけたり、何分で死 くしているが、あい変らずあの世話、この世 体職員をかけ持ちし川柳誌の発行に微力をつ 所の中で薬剤による手洗いを励行して いる んだとか、ずい分臭い仕事もした。現在も便 衛生行政の仕事を十一年、 町内の衛生委員など貧乏性は一生続くも 衛生を勉強して

朗

団体職員

藤

井

明



雑布ばばアとあだ名をよそによく動き 和洋家具 天 正 千

梢

主婦小林トメ子

幸わせょ青熱かける仕事もち私生活も触れ商談まとめあげ悪痴言わず植木鉢にネギ育て人の花赤いが努力忘れまじ

倖わせは情熱かける仕事もち

各メーカーのマホー瓶や和洋家具を販売していますが、近頃のお客はいろいろと値段だていますが、近頃のお客はいろいろと値段だていますが、近頃のお客はいろいろと値段だていますが、近頃のお客はいろいろと値段だていますが、近頃のお客はいろいろと値段だていますが、近頃のお客はいろいろと値段だていますが、近頃のお客はいろいろと値段だていますが、近頃のお客はいろいろいる。

思っています。

ならではの楽しみの一つに加えられると私はりのよくない野菜を色々研究応用するのも女事づくりも私の大切な仕事です。あまり口当

食べ盛りの男子二人と動脈硬化の主人の食

せせらぎで商魂忘れた家族連れ一切がちんは上手に人を使い分けいがられば上手に人を使い分けのがりの大工仕事計どらず

主人は月給取りですが副業を一、二持って主人は月給取りですが副業を一、二持っての区役所の証明だの建築の修理を言えだのとがにんだん経験し内容もわかり度胸もついて仕事んだん経験し内容もわかり度胸もついて仕事が面白く忙しい程もりもりと意欲が出てきまが面白く忙しい程もりもりと意欲が出てきます。

「近頃は主人も押され気味で「お前の心臓には驚く」と申します。私は男性的な仕事もしは驚く」と申します。私は男性的な仕事もしは驚く」と申します。

先生の恋へ可愛いい批判をし



と相通じるものも感じる。

ストへの真剣なひとみ、楽しみも苦しみもあ ある。存分に伸びゆく子供達の足の長さ、テ

った職場、今なお最大の魅力がある。主婦業

百

唯心論やっぱり壁につき当り ひねりだすつもりかテストへ目をとじて スカートの軽さ少女の長い脚 同権は淋しどこかで矛盾する

元教員

楠

田

英

子:

化工勤務

谷

沢

好

祐

けた私は、終戦を境に急転した教育、社会状 勢にとまどってしまった。 教職とは聖職なりという、戦前の教育をう

唯物論」「同権は淋し」そんな私の姿で

大阪の夜とは縁の無い給料 洗っても汚れの残る手が稼ぐ 給料日だけのハンコが要る勤め 何がゴールデンウィーク交替勤務なり ハイ下宿代と女房殿に出し

ブルーカラーである。会社の正式名称でなら を繰返す勤務ばかりをやっている。 年始年末に関係なく早出、遅出、夜勤、休日 り「硫酸」が私の飯の種である。日曜祭日、 て以来約二十年間、ニキビ華やかなりし頃よ 実務社員。要は職工さんである。戦後入社し ぬ日、それは月に一度の給料日である。 め、ネオン艶やかなミナミを横目に 見て 帰たと油の結晶。幾何かの紙幣をポッポに温 つく工場。 公害でうるさい亜硫酸ガスの匂いが、鼻を 何曜日かはよく忘れるが、 蛙の子は蛙。 酸で荒れた手に機械油が浸み込 現代語でカッコ良く言うなら 絶対に忘れられ



嗅ぎに来た猫撫で往診鞄閉ず 苦しさは癌に希望を持たす嘘 看護婦に居留守つかわせ二日酔

医 師 那

谷

光

郎

農 業 河 原 3 0 3

銀の輪をいささか笑う聴診器 戸がきしむ往診先で白湯が出る

行かなくてものんびりしたいものと思ってい 思い出は数々あるが命ある句は作れなかっ 嘘を言って悩んだり悲喜交々日々を送った。 の酒席ではよくハメをはずしたものである。 業を継いでもらった、余生を悠々自適とまで た。恐らく今後もそうだろう。今は息子に家 れなかったので自分の時間がなかった、たま せ、以前は開業医の診療時間はちっとも守ら 雀羅まで行かなかったのが、せめてもの仕合 働いた天職と思っていたからであろう。 難病が治って気をよくし、癌に希望持たす 私は平凡な町医である、四十五年間それで

> 宅地となるまでは石を拾わん 六十年歩いた足へなおも灸 デカンショの本場や半年ねてこまそ 花作り人に知られぬ鋏だこ 道楽の粕がアレコレ金になり

られぬいのちと果てない働きとを倶に亭け得 かず山林の愛育、松茸増殖の研究に励み、限 が、といって半年寝てこまそという訳にもい た幸を神に謝す日日である。 で冬期まで温室に働くなど思いも依らない には斯く答えたい。此の齢に欲はもたないの さて僕の仕事は農業、委しくは花弁園芸。 さんせと交渉を仕直さねばならないだろう。 てな事になったとしたら、神様まあ待って下 さあらば命のうち働く事を固く戒めるぞョ」 生の働きに賞で爾今五十年の余生を与えん、 十アール何ぼ儲かりまっか、と愚問する人 或夜フト昔語りのような神が現れて「汝半

天職と励んだ業を子は嫌い



に精を出した。

水を飲んだ苦い思い出である。学校卒業直前 ばさんに助けられた。水のみ百姓の子が池で

第二句は一人遊びの私が池に落ちてあるお

に父に逝かれ、一人息子の私は母と共に農業

慈雨 農に居て食糧難を子沢山 豊作へ手を豆にして刈りすすめ 小 の池 遣 (1) 蛙の伜溺れけり 銭の時踊った子

お

農 業 太

会社役員

福

井 多 蘭

子

碑

たが、杭打ちのエンヤコーラでリート もできなかった。 や田植え準備の忙しい中にも人手を傭うこと 後で帰農の父は貧しくて雨を待っての水取り る日は小遣いも一銭の倍増だった。祖父の没

湖 1/ 死の崖へぶっつけている若さ 有るも無きも青天井の下に住み あめりかが見える丘あり七士の

遭難へ空から念ず花の束 禅堂の朝の光を膝にうけ

忌の句会「天井」へ、正に十五年目の句とは たいものである」と。 争の真因を探求して、恒久平和の確立に努め に遠く眼を海の彼方にやりながら、大平洋戦 いで碑前に立つ。碑文を最後に刻み、 戦犯七士の碑があります」ハッと息をのむ思 に仰臥した。青い、 第二句は十五年前、 句にはまとまらなかった。路郎先生一周 南国の空は私に迫って 商いの旅の果、 草むら

なのか?新しい農機や車を買い、とにかく伜ふやせで子沢山。農は国の大本とは昔のこと

今の妻を娶り豊作とは別に子どもを産めや

ご機嫌をとっている今の私である。

なさま、三ケ根山頂には、絞首刑になられた

第一句は同業者慰安旅行での温泉行。

高 鷲 亜 鈍 さん 0

目 抄の作品 を味わって

金魚の糞が断れたように、来ないものと、思路郎先生他界されたからには冬青あて送本は 訳である。 ながらく、物質的なお返しをしていないのに のを毎月お送り下されこれまた感謝している っていたら、『川柳塔』になっても、立派な 柳雑誌を送ってもらい感謝をしていたが、 生路郎先生の『川柳雑誌』の頃から、 まず最初、御礼申さなければならないのは 随分

術で、片眼開眼した自分であるから、 で眼を病い、約半カ年程、他の人の顔も見え う、と云うのは、私も三年前から、 心にうたれペンをもつ気になった。なぜだろ みて高鷲さんの作品の底に沈む深い心境がわ ずに居たけれど、金沢大学付属病院へ入院手 ころが高鷲亜鈍さんの盲目抄の作品を観て、 雑務に追われて書く気にもなれなかった。と つも、 何か文を書きたいと思いながら、 白ソコヒ 身に泌

かるようである。 柳塔の重用な位置に居られる、清水白柳

> 眼を病ずらって亜鈍さん、と書く親しさが生々を随分読んだだけではあるけれど、自分がの論お会いした訳でもない、只、氏のエッセ 味わってゆこう。 れたのである。で失礼をお詫びして、作品を 私は、実を申すと文通したこともなければ、 ことはあたりまえだが、高鷲亜鈍さんと書く っているから、さん付きでの親しさをもわく 若本多久志、 伊藤茶仏の皆さんは、 顔も知

蚊よとまれ呉れてやろうぞわが血でも

れた作品でもある。と書いて悪いだろうか。 浮かぶ、大体発表作はすらすらと巧みなく生 やろうぞ」の心境は、禅坊主の禅定が、 ある。手で打ち殺す気にもなれず、「呉れて れ、蚊は見えなくても血を吸っている感触が を想わせる。亜鈍さんが夏じっと座っていら 構成からくる作品の姿は、自由律的なリズム 不思議である。五七五の定型でありながら 眼に

千円も五千円も同じ札 眼明きも、 作品の心は読みとれるだろうが

> で飾らない作風が好きである。 は、この世から消えたくなったものだ。平凡 盲目のというより、俄か盲の哀われさ悲しさ た私には、千円も五千円も同じ札を体験して ある。それは、半カ年ほど視界の暗さを知っ 悲しみは、眼明きよりか深く味わえるはずで 視界がなにも見えない人間こそ、作品の中の

冷たい表情から掬いとる淡水魚

作品に。 句意は全々相違するが私の二十八才の頃の わが寝顔見れないことの怖ろしさ

鏡で見る本当の自分の顔は絶対に知る由もな とる、となったのだろう。 るのは、眼明きの頃の自分の顔を想い、亜鈍 る。亜鈍さんが「冷たい表情」と現わしてあ の失明は、眼明きの時の自分の顔を知ってい る。なのに寝ていない時の顔は、盲目には、 い。眼明きの寝顔は、これも見えないのであ れば、自分の顔は手さぐりで知る外にない、 見える作品でもある。 の冷たい表情を心眼に浮かべ、淡水魚を掬い 所謂絶対に自分の顔は見えないけれど、途中 には、見る鏡はない。生れおちるから盲であ 顔は、鏡によって自分の顔が見える。 救いのない嘆きが

亜鈍さん日く 命令を即座に聞いてくれる杖

杖でなければならない」 た老婆がつく杖のように、盲人の頼りすがる なアクセサリー的効用をなくして、 「ステッキは、紳士用の愛用品、口髭のよう これだけで、作品の内容は読みとれる。命 腰の曲っ

って「くれる杖」 しさの 即 Ó 煩悩をうち捨てた。 なかにホッとするものを知っ てくれる杖とは、 にしみじみと人生航路の 諦観が、 もう 悟りが き あ

タクシーの座席について前を知る 怒っている証拠返事をしてくれ

瀬舞狂君という方がいた。 亡くなったが金沢柳界に新人の星を失い、 にじみでている。 場所の位置をたしかめて 場所の位置をたしかめている有様が、 惜しまれた。 彼の作品に、 若い川 彼は肺を病らっ 柳作 作の 7 長 品位

た。

によせられる原

たん壺の底に阿呆なおれがいる

ない を離れて 困った。もう生への 読む人をして身内が感動で一 もう生へのギリギリの 涙がしきりと瞳 嘘の

小さくなっ

たひが

3

心

が

背

伸

びさす

沢

作品を私なりに味わって、こんな作品が生れてくることは少ない。の生活の中からは、読者をして心 受できる。 通り なる。 生活の中からは、読者をして心をはすぶる がそのままぶち込んでいる生命の躍 批判を起えた、十七音字へ、 何のさわりのない平穏無事な日々の で、 高鷲亜鈍さんの盲目 経済的にも、 作品が伝統とか、 精神的にも肉体的に こんな心に 革新とか、 I抄を読 高鷲亜 亜鈍さんの 動 鈍 順風 を感 とい もそ

t,

間

OK

手記されたのか、一 下さるようと、見知らぬ男の私は、を息炎でいられるのを願い、お身大 した私はそのご苦労を想い、 :点字でのものか、「川柳塔」によせ から一文を書いたのである。 眼なし鳥に六カ月ほど生活、あるいは奥様か、誰かがもせられる原稿は、亜鈍さん 亜鈍さんの お身大切にして 古都、 毎日

> 堺 市 文 化 祭 . 第一

市 民川 柳 0

会

話

中 島

雄次郎 生々庵氏 会場 時

堺市

教育会館

(高野線堺東

車

月十九日

0

午後一

あきらめ

榎 聡夢選 好郎 白柳 選

用

▼投句の方は堺市役所社会教育課へ。席題三題当日発表・名三位、矛位は馬 三題当日発表・各三句。 百円。 秀句に呈 賞。

共催

堺 市 作 教 育 家 協

堺 市文化 団体連絡振興 委員

•麻 生 葭 乃•

お買物資金の額立におたのしみが プラスノ満期までの12カ月間にいろ いろのたのしい企画をお贈りします 会費 1カ月(ロ>1,000円

でのご入会には

近

楽天家雨は降ら

な

1)

事

ic

决

8

亡き祖母を偲う

ても空座

っても空窓越

0 ず

臨

終

0

日

0

眼に残

る

草

葡

萄

詠

子

は

四

+

私 風

0

跡

をまだ踏

ま

煽

1)

0

\$

かが

起らぬ

ことある

事

実

★秋季特別大行事ご招待 ★記念品呈上

主 大久学寺が大行事 - お号 美空ひばり公演(梅田コマ)など 善光寺・上信スカイラインバスツ アー(会費一部で負担)など スカラ座・スパル座・北野劇場など 各種月例行事

■講習会

詳細・お申込は 6階友の会・

-220 942

111

村

好

郎

選

広島県 岩 谷 Ξ 枝

観音の賽銭箱も大理石

孝養の母負う人に洞涼し

逡巡の愛を嘲つて雲走る 女ひとりきびしく殻の中に住み 振り向けば涙とならん歩を早め

云い勝つた心の隅を風が抜け 自嘲する焦点のない高笑い

島根県

堀

江

芳

子

荒削りのままで日曜大工すみ

見晴しへ不快指数を捨てにくる

入智恵をしてから話又こじれ

三倍の乗越料に酔がさめ

青い目に唯美しい奈良京都 大阪市

小

谷

葉

子

断層に孤独を愛す花椿 夜に吸い込まれ十字架と対話 市場籠ああ青春はまたたきぬ

停電かそうかと夫だけ動く箸 意気地ない夫でないけど見えぬから 声かけ合つて盲人固い握手なり ガン検診子宮ないのにすすめに来 日記帳字がおどつてる悔なき日

下関市

志

賀

木

石

古戦場爪跡もなくススキ舞う 本の鉛筆空虚な心かきみだす 南区医師会秋のレク・関ケ原

亡父の背を思うて上り墓洗う 独り居のかゆい背中がゆく柱 二声と呼ばさぬ妻にみとられる

秋芳洞にて

斎

藤 栄 次 郎

大東市

不器用に生きて妥協に遠くいる	姫路市 前	如才ない奴でそこいら搔きまわし	台風を避ければ実のらぬ稲となり	くちなしの若芽へ揚葉の知恵が産み	重病という断層がつきを変え	島根県 小	一目散子つばめ今し食い盛り	風吹けばこんな松にも風情あり	怪我させぬ愛情というどなりよう	ニコョンの瞳にもうれしい秋の雲	鳥取県 鈴	養鶏をやめると卵は高くなり	当然の権利幹事ら飲みなおし	赤い灯がふえて思い出消えた故郷	人々の故郷のたよりは寄附のこと	宇部市 櫛	曼珠沙華おろかな日日へちちろ泣く	負け牛の哀れ人間に食われ	「隠岐島牛突きを見て」(一句)	蒸発をするなら竹取物語り	父子対面涙のあとに来る苦悩	出雲市王
	田					砂					木					部						
	芙巳					白					村諷					いさ						
	七代					汀					强子					夢						紫
	14					1.1					•											1000
持つている噂へ銀行低姿勢	先輩のミスもついでに叱られる	ピンのあとやかましくいう家でなく	大会のムード閉会後もつづき	市高	る会	わたくしも役人ですと悪びれず	嫉いているのさえ解つてくれぬ人	惜しまれて去ると本人だけ思い	森		タイル風呂ひたつてすつかり晴らす胸	正義感強い明治に逆らわず	親切な女史と呼ばれる嫁きおくれ	鳥取市 藤	ボスの子がボスになつてた幼稚園	冷たい瞳たしかに妬心燃えている	天主閣溜息ネオン明滅す	港の灯旅のプランを狂わせる	倉敷市 小	3.50	シルエット重ねて心ずれている	爪そめて愛のしずくもない暮らし
				橋					Ш		加到			本					幡	ŀ		
				干					健					征					里			
				万					太					ш								
																				-		

也

郎

子

風

テキも焼け敷熨斗も出来余生あり	愕然と白い毛を視る昼の風呂	姫路市 大 久	葬儀屋は哀調おびてドライなり	死顔は義理も解かれて安らかさ	ぎすぎすの世事ゆえ笑うてみたくなり	可愛いさが何にもしない子に育て	八尾市高	茶摘女の歌ジェット機にかき消され	借金を笑つて断るにくらしさ	残業を終えアパートの冷たくて	星空へ洗濯物干す共稼ぎ	大阪市 大	美辞麗句残し薄情去つて行き	ころがされはじかれ西瓜売れ残り	夏祭り明治が残る夜の燭	なまじ家柄の重みで身が崩れ	米子市 八 .	のびきつて雑草はるかな空を恋い	寝押するズボン倦怠期を秘して	事故死の子に合掌歩道橋渡りそめ	のめぬ煙草に火をつけ反論きいている	仙台市 平
		保					杉					谷					木					野
		大夢					鬼					重					千					光
		子					遊					夫					代					道
島根県 堀	駈落に似た気日本の果てにおり	負けて泣く涙は他人に見せぬもの	学歴が何だ見返す意地を持ち	科学とは別の不思議を母信じ	豊中市河	思い出の丘なくなつていた故郷	日帰りの夫を握手で送り出し	お隣りも銀婚という志摩の宿	うなじみな見せてうれしい盆の髪	下関市 志	方眼紙明日の株値を推理する	合乗りのバイク出かける盆踊	精霊舟かついだ朝の二日酔い	チップさえはずめば海の見える部屋	長崎市 吉	流灯のゆきつくあてのないながれ	そろばんを弾いて女の愛枯れる	余生もう盆栽ばかり殖えてゆき	しのび逢いすすきの波に揺れながら	大阪市 和	パーセント大きく恩給チョピリ増え	豊作に値上げして積む米俵
江					本					賀					田					田		
正					雪					汀					季					痴		
朗					男					花					生					亭		

治り度い痛さに耐える汗をふき	二十年宿痾へ結着まだつかず	大阪市 半	社に波紋なげてエリート引抜かれ	月賦屋のカモにされてる2DK	肩書が泣くほどもてる隠し芸	尼崎市 中	久し振り逢うよろこびを顔に見せ	しやべる子へたすきの母のはかどらず	余生もう釣りの道具に引きずられ	京都府 菊	寝不足と下痢でニコニコしてる椅子	デボチンの汗履歴書の上に落ち	食欲をみたしてからの話し合い	大阪府 井 上	表情に見せまい女のやるせなさ	腹の虫おさえた笑顔がゆがんでい	別邸の秘密ペットの猫は知り八尾市宮	稲光り見えないだけが僕の得	始めから見えねばこんな悩みなく	意地悪か年のせいだか早く起き
		田				谷				沢				26	ä		西			
		夏				利				破				美恵			弥			
		生				美				天				子			生			
堺市斎	仲裁に入り双方に疎まれる	総入歯口もとだけが若がえり	整形手術気性までは変えられず	守口市 池 田	吠えられているのにセールス犬をほめ	秋刀魚焼く油も秋のいろで散り	秋白く病む娘の指のなお白く	竹原市三	言いたいこと言わず銀婚式追え	温泉で拾つた話題を土産にし	戸を開けて待つ親心子は知らず	仙台市川	いいわけにシッポのみえる夫いとし	いわけがすみカバンおきわす	横どりもようせずベルテルにもなれず	八幡浜市別	定年は来年だなあ月を見る	幸うすく前後に死んだ老夫婦	大阪市 塩	菊活けて夏の病舎に見せるまじ
藤				2				宅				村				宫			浜	
藤				豊平				宅不				村映				当す			兴	

乗り過ごし此処で降りる顔で降り	駅の雨まさかと思う妻もいる	守口市 田 中 笑 風	ムードにはよわい女の溜め涙	本番となれば浮気は出来ぬもの	といさんで育つた母のものわかり	尼崎市中溪慶彦	つまらないものの一つに新幹線	十二月までは南座お茶にごし	釜が崎テレビに夜の灯が綺麗	大阪市 堀 口 欣 一	目を閉じて背を向けた心まさぐる	生きる汗白髪ににじむ寂寥感	労わりの言葉は見舞客が受け	大阪市 江 城 功 雄	一万歩連れがあるから歩かれる	気前よく出せば寄附金しり上がり	句日記をまとめる夜の虫が鳴く	島根県大森孝華	一人去ねばまた一人寄る立ち話		風呂やから飯やに廻る独り者
		.風				彦				_				雄				華			
鳥取市	御香料罪ほろぼしにはずむ仲	恐ろしいワナを好意に見つけ出し	落ちた蚊をなお押しつぶす人の性	鳥取市	見習いもバイトもきつちり基準法	損得はいわず郷土勢に賭け	夏の宵刺激をさけて子と歩き	岡山県	仕事しいしい集金延ばされる	素通りをさせまいネオン点滅す	お隣りの顔見て伝言思い出し	鳥取市	皇室費だけ要求がぐんと減り	人工雨にさえ縋りたい長ひでり	審議とは名のみ米価が又騰り	北九州市	更年期らしい風邪にも妻の愚痴	秋灯を消して明日を考える	妻でさえ女の業(どう)をのぞか	大阪市	近くまで来たと御無沙汰驚かせ
河		U	生	谷	仏			目				小				藤			かせる	奥	
				尾				賀				林				田			0	Ш	
忠				虚				芳				曲				独				純	
												3								之	
志				風				月				香				楽				助	

隣の店にらんで棚の位置を代え 売れ残る豆腐のオカズに子の不満 売れ残る豆腐のオカズに子の不満	変語なくムードへ愛を任かせきり 責任額まだまだ頑張る足がある 電野市 森	気安さへ留守を頼んで出る間借り 反抗期親を見下すほどに伸び 大洲市 堀	耳うちで聞く伝言がこそばゆい 方言もおぼえて主婦の座にも馴れ 完璧な女 男に嫌がられ 鳥取県 川	宣伝の風船貰いにひき出され 鳥取市 藤	謄本の妻の縦線に忍ぶ過去
本	下	内	崎	本	
香	单	暁	秋	恵	
芳	子	風	女	子	
又一つとなりの庭は柿がおち 広島のなまりと共に子は育ちまつすぐに帰してくれぬ友が待ち	あわてては見たが年功序列制 因襲に勝つて気まずさだけ残り	打磨佐藤さん恩給の方も頼みます 戦前派の忠勤官吏細う住み 戦前派の忠勤官吏細う住み	一日を終え百姓明日の空を見る 一日を終え百姓明日の空を見る 一日を終え百姓明日の空を見る	五十婦さえ油断ならじと夜道さけ 金と暇の出来た夫を警戒し	嘘まぜる商う心のつらさかな 泉佐野市 大 エ
勝	鬼	菁	渋	文	静
子	焼	居	柿	晴	子

線路工夫昼寝の癖も板につき 河内長野市 森 本 黒 天 子	戦友と云うのを子供不思議がり立話しいきなりやぶ蚊にかみつかれ	人生にまだある宿題くすり飲む	青すだれ買いたて台風逃げてゆき 東大阪市 坂 東 若 芽定年制反対心で叫ぶ俺	それぞれの花のいのちに生きる幸松江市 岡 崎 祥 月楽しさは夫の留守に髪を変え	愛情をつなぐルージュの色を変え入院の夫の留守は釘も打ち 加賀市 木 村 美 穂	焼香のしんがりに立ち友偲ぶ駈けつけて泣きたい心へ世間態人づてに夫の逝去聞くえにし	セルビアは真赤心はもう燃えず とから供に連れ
台風予告みずほの国を守れ神 田 つとむ	かみなりさん雨を連れては来なかつた 善選寺市 伊 藤 歌 子	沖釣りに冷やしたビール釣り落し 床柱いつか背にする齢となり	実力主義住友さんもやると云う 笠岡市 谷 本 鈍 愚 坊	台風よりキャンプの娘気にかかり 台風よりキャンプの娘気にかかり	日弟の顔が揃うた悲しい日 日塚市 行 天 千 代	父の死 前潟県高野不二	夕餉の膳叱る言葉を押えとき 五腑守る歯も金属に支えられ 新居浜市 村 上 水 軍

タイル風呂張り替え母を先ず招き	鳥取市	ここだけの話をみんな知つて居た	近所気にしない太鼓とお題目	鳥取市	マネキンと同じ水着がお気に入り	未亡人派手な日傘へある噂	鳥取市	立ち読みをしてから眼鏡置き忘れ	体育の日入歯はずして出る強気	諫早市	朝帰り妻のふて寝にさからわず	一言だけ言うて登山の子を送り	鳥取市	夕立の気まぐれさえも近づかず	山みかん万策つきた水不足	松山市	お土産はおどつて見せる阿波踊	ひよつとしてひよつとするのをあてにする	京都府	世は無情落目の老舗ふりむかず	前向きのこころ陰口ききながし
O	藤	10		藤	9		藤	,,,		原			北			河		て	福		
	本			本			本			田			野			本		にする	村		
	鎭			和			佳			明			天			南牛			新		
	也			宏			女			春			人			史			海		
長女と育ち上座のくせがつき	会えばすぐ喧嘩の兄を		ほうき目はきつちり隣	スピツツも混血故に庭住		毒舌をこらえてくれる母が居る	後味の悪さをかくす作り声		根性があつてつき合い悪い友	大すすき釣つた話をきくも旅		訪れた砂丘も初秋の気配する	幻にあらず眼下に大砂丘		今朝の記事善人そうな子もまじ	ハイハイと云えないたちで出世		分別を捨てる手前で妻の影	サイレンが遠くへ行つてまた寝入り		お見合いへそわそわしてる方が母
がつき	の兄を待ちこがれ	米子市	の境い迄	住い	大阪市	母が居る	り声	茨木市	悪い友	くも旅	羽咋市	配する	丘	鳥取市	子もまじ	ちで出世	七尾市	の影	てまた寝	堺市	てる方が
	かれ	林	14		藤	9		吉			Ξ			近	り	世せず	松		入り	羽	母
					田											9			9		
					ere.			Ш			宅			藤			高			田	
		瑞			頂			悦			3			秋			秀			_	
		-111			留			Du						12.5			,,				
		枝			子			子			亭			星			峰			扇	

高槻市	妻の苦労知つてヘソクリおちつけず	苦労しているらし妻の寝相みる	呉 市	夢よもう一度登山靴をはいてみる	みせかけの倖せ人にふれ歩き	堺市	背景が無いから陳情ほつとかれ	保育器よ唯すこやかにすこやかに	竹原市	孫七人出来ても婆アになり切れ。	仏壇へお茶熱かろと吹いて上げ	泉佐野市	京風に釣られて味を見失い	陰口を叩いた口の濃い紅	名古屋市	蒸発をせぬよう化粧に念が入り	声変りした反抗にある理窟	大田市	満員車男ばかりで殺気立ち	バーのドア顔の効くのが先に押	小松市
Ш	ずず		槇	9		青		12	時	ず		大			花			藤		し	四
田			田			野			広			工.			東			田			方
ス			ш			#]			14			٦.			_			dere			天
/ "/			英			遊			-			チ			干"			軒			717
			24			71			n/a						久.			太			弘
子			詩			仙			路			3			良			楼			実
事故あつてから対策を立てるなり	熊本市 久	別居中愛の渇きを求めあい	愛媛県 嶝	CMをはさみ台風接近中	尻崎市 平	碁打ち打ち意見をされて勝つており	竹原市 脇	大正の孤独流流の旅をゆく	「明治百年」大正風物詩(その二)	出雲市 竹	ハイハイハイと渋々反抗期	青空へ木々は無欲の背伸びする	広島県南	湯わかし器母ちやんの城温うする	老眼にしのびよる年佗びしくも	東大阪市 本	空缶を灰皿にして一人者	腹の虫押さえて話円るくつけ	大阪市 宮	おだてるだけおだて貸金とり立てる	手相ほめてくれたが金は貯まらない
	野		本		井		本			内			条			多			本		
			満		露		政			李			露			光			地		

朋

裕

子

芳

己

子

楽

声

川柳塔

化二

名

百 岡 美 房

今年の二月号の近作柳樽欄の一頁にお二人の今年の二月号の近作柳樽欄の一頁にお小たという気持ちで一ぱいです。当によかったという気持ちで一ぱいです。生ずお二人に心からおよろこびを申し上げます。一位の竹原の不朽さんにはお目にかかったこともありませんのでお二人にしばって私がこのお二人を意識するようになったのは初れてのお二人を意識するようになったのは、本年度川柳塔九月の本社句会に出席して、本年度川柳塔九月の本社句会に出席して、本年度川柳塔九月の本社句会に出席して、本年度川柳塔九月の本社句会に出席して、本年度川柳塔九月の本社句会に出席して、本年度川柳塔九月の本社句会に出席して、本年度川柳塔九月の二月日の一頁において、本年度川柳塔和の一頁において、本年度川柳塔和の一頁において、本年度川柳塔和の一頁において、本年度川柳塔和の一頁において、本年度川柳塔和の一頁において、大田の一頁において、大田の一頁において、大田の一目にはいて、大田の一目にはいる。

逢うててもやはり別れる人と知りライバルにコスモス揺れるだけ揺れて

強烈なリズムに官能酷使する女盛り真女の皮を脱ぎそびれなんとなく鏡に嘘がほしい今日は熱の残りを犬とじやれてみる

童心にかえる砂丘の足の裏

葉

子



本社前で 左・美巳代さんと 右・葉子さん (美房氏撮影)

感覚を精一ぱい十七音字にぶっつけてうたい り出たお二人が競い合うようにして、 までは、柳樽欄の上位陣はいつも川柳雑誌当 らってきました。川柳塔誌創刊号からその頃 句ずつ入選していたときからです。それ ましく思ってきたものです。 うけるとともに、お二人の句にいずれも私に さと、その立派な内容に驚きと大きな感銘を あげておられる句を拝見して、 から突然時を同じくしてトップクラスにおど 々の上手な句がならんでいましたが、 時からの常連の方や、私たちよりも先輩の方 人の句をくらべながら楽しみに拝見させても 名前がならんでおり、いずれも立派な句 無いものをもっておられることを特にうらや 毎月川柳塔誌のページを繰るたびにお二 その進歩の早 新しい その中 が五

で捨てた日に風紋のあざやかさ 美巳代 で捨てた日に風紋のあざやかさ 美巳代 さらに私なりに好きな句を次の五句ずつ選ばせてもらいました。

とうしてひろい出してみます! 粉な雪を総身に受け別れけり 適当に甘えて妻のおろかなり

こうしてひろい出してみますと、二人の句の中から、芙巳子さんには古のある淋しさというようなものを感じるのは私だけでしようか。 最後に私の言いたいことは、お二人とも昭和生れの作家であるということです。今のこれからの川柳/をつくりつづけて行かれることをお祈りするとともに、私も含めて昭和生れの男性陣の奮起を期待したいものだと知生れの男性陣の奮起を期待したいものだと思っております。

(筆者は大阪府警警部補)



こっそりと買った彩票当りそう
という何を大陸時代に作ったことがある。という何を大陸時代に作ったことがある。という何を大陸時代に作ったことがある。という何をも当ったためしはない。だから、宝くじに対してもとんと食指が動かず、今もってがに対してもとんと食指が動かず、今もってがに対してもとんと食指が動かず、今もってがに対してもとんと食指が動かず、今もってがいたがしたその細長いである。大陸の彩票だが、五枚つづきで一円さて、大陸の彩票だが、五枚つづきで一円さて、大陸の彩票だが、五枚つづきで一円さて、大陸の彩票だが、五枚つづきで一円さて、大陸の彩票だが、五枚つづきで一円さて、大陸の彩票だが、五枚つづきで一円はずもない、全の場所へとすっ飛んでは、ほの子の様にして、食うのにもコトケく彼等の暮しにはしくて、食うのにもコトケ(彼等の暮しにはいる。しくて、食うのにもコトケ(彼等の暮しには、しくで、食うの形が、アイヤ、メイファーはずもない、金票だが、アイヤ、メイファーはずもない、金票だが、アイヤ、メイファーはずもない、金票だが、アイヤ、メイファーはずもない、金票だが、アイヤ、メイファー

を工面してきては、小さい紙切れ一つにうつをぬかしカタズをのむのである。ばかばかつをぬかしカタズをのむのである。ばかばかつをぬかしカタズをのむのである。ばかばかったぬかしカタズをのむのである。 むかし河南の洛陽に橋がなかった。両岸の住民は非常に不便を感じ、何卒ここに一つの住民は非常に不便を感じ、何卒ここに一つの住民は非常に不便を感じ、何卒ここに一つのは、この身に打ち当てたるがないので閉口され、いろいろと考えられた末、自分の美貌を利用して船に乗り、誰でもよい、銀銭を投ぐ、この身に打ち当てたものがあれば、そのけ、この身に打ち当てたものがあれば、その中から、一人の乞食道士がひよう然と現われもと金を工面しては投げつけたが誰一人として打ち当てるものがない。そんな騒ぎの中から、一人の乞食道士がひよう然と現われもい。

またぞろなけなし

「庶民のため身を投げ出して苦労しているというのに、お前のこの邪魔だては断じて許あとを引き受けて橋を作ってたも」と憤然と姿を消された。
と情然と姿を消された。
と情然と姿を消された。
と情然と姿を消された。
と情然と姿を消された。
と情然と姿を消された。
の手前やらぬかりにもいかない。責任をもっちる。かくでをなはとうすればよいか、八方頭をひねった末に思いついたのが「ちーはー」である。かくじを案出した。銅貨一枚でも当ればそのをつくってはそのくじを買ったので、またたくまにばくかすやすとっなが、といかの当ちる。さきの話は、いわば道教の大け、公募のため、バクチ場の冥加金をテラ銭というのため、バクチ場の冥加金をテラ銭というのである。
「庶民のため身を投げ出して苦労していると情然と姿を消された。
と情然と姿を消された。
と情然と姿を消された。
の手が過ぎて呂祖師もホイしまったと情然と姿を消された。
こうなると神様のにもいかにいか、八方頭をひばられた。
なるのためのだっていると神様でさまざまのまればそのから、この方が確率は高い。かくすまにばくやすやすと竣工した。
とが各地方自治体主催でさまざまののの、またたくまの胴元で、よく賭場を開いたものだ。(このため、バクチ場の冥加金をテラ銭というのである)

立を思い立たれたという、まさにケシカところで、観音様が色じかけで洛陽の橋 まさにケシカラ

亦 ネ 0 肩 加 寄 0 1 須 10 姉 添 坂 3 11 市 尚 N 寸 を 女 高 き あ た す ま 10 10 れ < 導 11 連 步 か 調 九

とでる妙たたで人そ「れン 火二花呼はが不いた大のと観る話で自会が、可なと流明に音の (アンドー) - 1 (アンドー) - 1 (アンドー) - 2 (アンドー) - 2 (エールー) でしようけつを極いいうしろものでよりのさる大官かれ、致富全書の現代にてもった賭けりのヤクザが思いた。 思もだ行治出会致タ 当の はの歳のがし百て(富木 ドホり胴 本は、ちーは一のカードの本場は一とはよばず一とはよばず一 1 カ ンを大 が思いつ。 が思いつき、 がある。 である。 である。 である。 である。 がらっき たまり事と 表。 ーは一の教育のる。このオーは一という。 一は一という。 一は一という。 一は一という。 一は一という。 一は一という。 一は一という。 であれるである。 である。 である。 である。 である。 である。 である。 発する。(ダート る。き った会海が一き。は事出が つ事スをこ し手応えが、上海の下層と上海の下層と上海の下層と 御である。 一の一項がよれてのカーリの人のは、ローの一項がよれてある。 一の一項がよれてある。 た墜あせの も落るて花 1 °貰会 つる。 1 イ上で。ドでの日あ頭い 一海い玄みい間本りにわ な官民を類は前、か憲衆占は安中毎

日上ば実魚門広めでが大本一く名、に東、や横筒 日本でいえば 大筒に対し、 大筒に対し、 大筒は、 大崎は、 大崎は し対

柳

とあた の数字に、 いまなに、 いまなに、 いまなに、 いまなに、 いまなに、 いまなに、 いまなに、 いまない。 チらっ島 のり て無数6 でラがた 7 ザ のい三 点のク建 点でおわかりが たむろするはがたむろするはがたむろするはがたむろするはですで、バクチョウででは名儀ところでは、カーボールでは名儀ところでは、カーボールができる。 っ次 流 加たぐり り述チで儀みもウもが × い神 がである。いである。 組だ。 フ 渡が仕 1 テあせに 来し血が から のおあ んじある 大組っひ 数ので銭 血神 をそ つ一脈定 ばはああれめピ を国 に肩

大好評の宝塚大人形館.

■歌い踊る620体の人形たち 世界はひとつ〈宝塚大人形館〉

お舟に乗って館内に入ると、可 愛い人形たちが踊り歌って迎え てくれます。100円・小人 50円 このほか、宝塚歌劇をはじめ、

新芸座、動物園、植物園、おと ぎセンターなど娯楽施設が完備

■ 入園料…130円・こども70円

お

大 阪 板 会 所本、 折

句 集 0 中 0 先 蹤 句

に最も近いと言われているものに洒落本があ 穿ちを主とした可笑文芸として、「川柳」 もってくる。

と称していたと述べられている。 年はじめて「異素六帖」が出され、話」「聖遊廓」等があり、江戸では 寧ろ大阪の方が先で、大阪ではこれらを<u>粋</u>書 間に大阪で出版された洒落本には 究」によると、この種の文芸も上方で発生し 延享四年には「百花評林」、その他、宝暦年 えられているが、高須芳次郎氏の この洒落本も先ず江 「聖遊廓」等があり、江戸では、宝暦七「煙華漫筆」「浪花色八卦」「穿当珍 「煙華漫筆」「浪花色八卦」 戸で発生したように 「京伝研 洒落本は 「陽台遺

であったことは否定することのできない事実 た松木淡々等の俳諧高点附句集の刊行の余波 玉川」の刊行も、元文寛保以降大阪で流行し されている江戸座俳諧の高点附句集「俳諧武 川柳点の成立に最も多く寄与したと

句合と江戸万句合との交渉の考察が重要性を 寛延に続く宝暦前期における上方の前句附万 この様な文化東遷の傾向を考えると、

> 草」(大阪板)に収められている一草舎晩鈴あって、宝暦初年刊の会所本の合綴「おきな 等については前句題も併わせて示して みよ ように川柳点に酷似した句が見られる。 評「柿本大明神奉納五千句集」の中に、 先ず、最も注目すべきは、大阪の晩鈴点で こ次れの

我伊 達に下女か髪迄結てやり

名物 身の 伊達に下女か髪迄結て遣り を買か無筆の旅日記 「川柳評・宝七・一一・五 揃ひ社すれ~」 「晩鈴点 よい日和かなく」 晩鈴点 春めくくくく

道中記」は柳多留拾遺の〔二4〕に、それぞ れ一句立の句として収められている。 柳多留の〔初3〕に、「名物を喰ウか無筆の なお、この最後の句は、鈴木勝忠氏による いる句であるが「身の伊達に」の句は後に 名物 「川柳幹・家七・一二・五 尋ね社すれく」」を喰っか無筆の道中記 柳立机の宝暦七年に川柳評に採られ

元文二年の「豊の蟬」に先蹤句があると

いう。

311

雄

手紙 12 1 狸と書 いて籠に

知 手紙 JV 人に斗子供、茶を運 狸台に、鯉をのせ 川柳評の所在不明 柳多留五36

10

1

(腕鈴点

いやはやくく

知る人にばっかりしている子のきうじ 川柳評・明五礼4 うんのよい事/ 「晩鈴点 さりとハー

ということである。 附として詠まれた附句を一句立にして、折句 であるかのように偽装したものが発見される が、この中の句を調べてみると、元来、 人(至席)の序を附して大阪で刊行された 「俳諧折句式大成」は折句集だと称している 次に指摘したいことは、宝暦三年に呉陵散

混入していたということである。 散人が、江戸の呉陵軒可有に十年も先立って も鑑賞に値する句が多く存在し、恐らく呉陵 ひそかに前句附を一句立にして折句集の中に

(1) 、藪入か親の異見を小サ

丁に発見される初代収月評の句であり、 の句は 「口よせ草」(天文元年刊) 折句式24 の 41

は「広いことかなく」であった。 (2)又折も有っと腹を立っ残し

なっている。なお、この句が川柳評や泰月評 李坡撰「明石人丸大明神三万句集の 前に述べたところである。 柳多留拾遺にも採られていることについては にあって、この前句は「たゝく灰吹くく」と の句は、延享四年の堺の会所本、瓦竹堂 (折句式25) 下5

(3)我伊達に下女の髪迄結っ 遣 (折句式11)

~ 」に附けられた句に、 石柿本大明神五千句集」の前句「春めくく (宝暦初年刊)所収の「奉納明

身の尹童これでいる。ように改めた句が取られている。 とあり、この「下女か髪」を「下女の髪」に 我伊達に下女か髪迄結てやり

この原句の評者は大阪の一草舎晩鈴であっ の伊達に下女か髪迄結て遣り

示してみると、 【大成」から川柳評や露丸評に採られた句を とのような例は他にもあるが、この「折句

足音にニッ 10 成り 影法師

足音で二ッに割れるかけほうし 【川柳評・宝七・一一・五 揃ひ社すれ~ 折句式31

見ると、

かなり後になっても、

ついでながら、大阪板の宝暦期の折句集を

掛乞かくれ、和讃を長っ

近 か 附々にはかり子供、膳居へる 「露丸評・宝一三・九・二五 無理な事から 無理な事かなく 折句式12

知る人に斗子供がすへるぜん 「折句式了」

う句があるが、これも 自の中に「石塔の赤い信女がまた孕み」と その他、文化四年刊「柳多留」四十篇の26 石塔の赤ヶ信女かまた孕゙゙ (川柳評・明四智2 柳多留五篇42)

る「落城の濠に浮いてる吾妻形」の類句とし また、 右の句の剽窃であろう。 一般に「川柳」として伝えられてい (折句式4)

落城 の堀に張形浮て有

である。 と推定しており、実際、前句附から取ったも句と折句として詠まれた句との二種類がある に収められた句には、前句附を一句立にしたは考えられない秀吟が多いので、私はこの中 成」には到底当初から折句として詠まれたと というような句も発見され、この「折句式大 じられると思う。 成」によって、前句附の前句脱落の気運が感 坡点や宝暦前期の晩鈴点或はこの「折句式大 いずれにせよ、上方においては延享期の李

> 相性は聞 たし年はかくしたし (宝暦元年・和国車)

「知たし年、隠したし

悪ル 相性 口の方へ日傘をかたぶける

川柳評 に生れた句とされるであろう。 見える「竹槍は切落しても元の槍」なども、 の瓢水・蘭州撰「夜の花」(大阪板) 播州寺家町清書所常人主催の奉納前旬付句集 とは言われないが、宝暦八年三月下旬開巻の 右のように剽窃されていることが知られる。 右の二句は発生期の川柳点に影響を与えた 悪言の方へ 〔宝暦九智3〕や柳多留の〔三〇5〕 青傘かたぶける の中に

偏在していたのであったが、これが宝暦前期堺の瓦竹堂李坡を中心とする点者連の選句に 中でも、「俳諧武玉川」の出る前に、堺の会 板の会所本、折句集に多いということになり所本には極めて稀であるのに反し、堺・大阪 おいて、川柳評の先蹤句の存在は京都板の会万句合に先行する上方の前句附または折句に 何集に目立って来たことになる。 万句合の先蹤句、 もし、これを一括して考えるなら、 、何合の先蹤句、特に川柳点の先蹤句は泉州寛保・延享期の上方の会所本には、江戸の

閑却されていたことであった。 成立を考える上に重要であるに拘らず、 **蹤句の一群の存在していたことは、川柳** 所本の中に江戸万句合(川柳評を含む) 川柳点の の先

目 目 抄

高鷲 亜鈍

ここ二、三年直に新聞を手にとった事がない。活字が読めないからでもあるが、その様い。活字が読めないからでもあるが、その様な日々の社会、国の内外ニューズは、テレビやラジオを通して聞き一応は判る。しかし活字が全然読めなくなった一、二年間、漢字を示してくれたら、たちどころに分るであろう耳新しい言葉が、随分増えてきて耳だけでは 薄確な意味がつかめないので困る から である。いま思い出すまま少し書き記してみる。カミツ都市。コウガイ対策。カトウ競争。シカミツ都市。コウガイ対策。カトウ競争。シカミツ都市。コウガイ対策。カトウ競争。シカミツ都市。コウガイ対策。カトウ競争。シカミツ都市。コウガイ対策。カトウ競争。シスの様は、一般である。

自画像を大きな石の下へ敷きというできない。というではわが役目大学出の故に苦悩の多い豊山大学出の故に苦悩の多い豊山が役目がを残さず幽霊北へいくというできれる。

不甲斐なく手のなる方へ追いすがり 黒頭巾に取囲まれているようで 黒頭巾に取囲まれているようで 悪動では宣がお好きなディレクター 変海の珊瑚は酔うた面みせず カラッポな頭に白髪とみにふえ 少年の頃蜻蛉の目玉をついたもの 闇討へ前後左右に気をくばり

豆秋句集

ふるさと」雑感

直原七面山

「ふるさと」を読んで特に気付くことは、「ふるさと」を読んで特に気付くことは、とにかく、猫とか犬とか、動物に関する句が践に多いということです。
氏が如何に動物を愛したか、愛したが故に氏が如何に動い上げてゆこうと努力なされたかがあたく窺えます。

男女の差と言えばそれまでですが、氏のこめで一・六%。「福寿草」の六十三句、十一名には遠く及びません。の六十三句、十一のには遠く及びません。

の方面への関心が薄かったことは確かのようの方面への関心が薄かったことは、三百六つの中に「死に関する句」が十六句も誌されていたことです。これは他の句集にはちよってはたことです。

さてそれはそれとして、一条豆状天の全部を「らりるれろ」のどれかの字句で終っていち「らりるれろ」のどれかの字句で終っていち「らりるれろ」のどれかの字句で終っていた言えば、句の最後が少ら行べどめ、即

か。否柳人の全ての人々が私と同じ思いであの句を見たいと思うのは私一人だけであろうさてそれはそれはして、一茶豆秋氏の全部

なと今更ら思い知らされます。

られます。流石路郎師につぐ名作家であった

しかも氏はそのことに充分成功なさってお

ろう。

う活躍しているかをこの目で確めて見たいと れだけ上回る動物達が豆秋氏の筆にのってど 思います。 私はそれらの句の中でこの三十二種類をど

れるべきファンタジアの一つであろうかとも 思う。と同時にそれは、長く柳史に書き残さ さぞかし美しい詩であったに違いないと私は に長きにわたって交された「友情と会話」 ともあれ、氏とこれら愛すべき動物達 0 は 間

年

―「ふるさと」を一読みて ——九六七·九·一七—

疑問

時事吟否定への

Ш 水

で席題「うぬぼれ」の選をされた米田耕三君 話がちよっと古いが嫩栗川柳社の6月句会

三君の言葉にちよっとした抵抗を感じたので 事だから没にするといわれたが、私はこの耕 の句についてこれはよみうり川柳のような時 うぬぼれはコスイギンかジョンソンか

> ら没にするといわれたのなら話が判るが、時 事吟だから没にするというその理由を知りた ある。それは句が平凡だからとかよくないか いものなのである。

した落首、狂歌、狂句、地口、警句等が盛ん 棘に揶揄したものといわれ、中でも に行なわれたものであって、当時の政治を辛 の圧政を恨んだ江戸町人によって柳沢、 失政や水野越中守の緊縮政策を諷刺、批判)から天明年代にかけて時の幕府の権力者 そもそも時事吟とは明和(柳多留の出 役人の子はにぎにぎをよく覚え 田沼

0

であることは周知の事と思う。 の句などは今日でも結構通用する内容のもの 今手許の柳誌を拾ってみるに「ふあうす

句である。

と」5月号の明鏡府の作品に 少女歌手人気へ警官狩り出され 鉄板が敷かれ久しい地下工事 お茶席のズラリ膝上一〇センチ 怪獣ブームまた大空の恐ろしさ 現代の娘家付きカー付婆々抜きを 、ストセラー「頭の体操」に自己嫌

作品や45頁の素生氏の近什 0 句があり20頁の光武弦太朗氏の票の名前の

猛またはベトナムを詠んだ作品もある。それ 等の句は立派な時事吟ではないだろうか。ま 「平安」6月号の平安抄にもロポポロや藤 おしなべてミニスカートを膝で蹴

> け、ユトリロを詠みこんだ句等数え切れない 人吟中にもあるしその他レンタカー、通り抜 から明治百年を句材にしたものに平安大会の 見られ「川柳塔」の6月号に至っては共和製 バ抜き、村田周魚逝去等を肩書にした近詠も 校優勝、明治百年、怪獣、ミニスカート、バ ほどである。この他北の富士優勝、津久見高 糖菅氏保釈の肩書の近作さへ見られる。 「開幕」中にも二句あり「番傘」6月号の同

来た

三社共同提供とはケチなこと 「川柳三重」6月号6頁に

これは富士野鞍馬氏のテレビへの所見の

時

問題点もあるようだがこのようにみなそれぞ 作句時において時事を意識するかしないかに であることには間違いはないのである、 も当然であり従ってその結果これらは時事吟 るのもいいしまた句想として取上げられるの 事吟といっても句の良し悪しは厳格に判別す 度に私には首肯けないものがある。ただし時 うに時事吟であるからといって拒否される態 ることは許されてよい筈であるが耕三君のよ れの年代の時点において社会世相を川柳にす る必要のある事はいうまでもない。 おはなはんの人気が上ればそれを句に捉え ただ

ると同時に優れた時事吟の一つでもある。 のごときも当時においては見事な写生句であ 咳一つ聞えぬ中を天皇旗

松風に石も飛び散る関ケ原(古川柳

柳医家関ケ原へ出陣

Ш

子の伝説、養老の滝へも

孝

不二田一三夫

ル男十七日 (日) 午前八時、長堀橋駐車場 ルをゆるされた。 行先 き は / 関ケ原、から加をゆるされた。 行先 き は / 関ケ原、から加をゆるされた。 行先 き は / 関ケ原、からが表れている。

大阪市南区医師会々長である生々庵主幹、小石夫人、山川阿茶女史、福井野迷路元軍医中将閣下という川柳人を乗せた観光バス三台が名神高速道路を東へつっ走る。「乗りおくれずによくこられましたネ」と小石夫人がバスの中で云われる。「一睡もせず徹夜でした」

一三夫・阿茶・小石

(久子さん撮影)

琵琶湖が一望の大津でちよっと息を抜き、
護才のネタ仕込みのほうが忙しい。
とはいつも徹夜にきめている。川柳医家諸氏はすでに
世にれるものがある。川柳医家諸氏はすでに
世に不足の目にも初秋の窓外の風景には魅

秀句鑑賞に

谷沢好た作家群

祐

略で順を追ってみましよう。 略で順を追ってみましよう。 略で順を追ってみましよう。 略で順を追ってみましよう。 の (9句)は薫風氏ただ一人でした。以下敬称 の (9句)は薫風氏ただ一人でした。以下敬称 の (9句)は薫風氏ただ一人でした。以下敬称

·集一—(1句)は百六名。 美(現・不朽)八郎・霊眼子・快夢起 生・旭峯・滋雀・古方・章子・宗太郎 ・久米雄・正朗・多久志・春巣・緑之助・笛 ・奇童 – (2句)庸佑・静観堂・満潮・紀世 ・野迷路・いわを・文秋・三司・酔夢・愛鳩 静馬・玲人・阿茶・遠二・峰子・小石・春巳 ・代仕男・喜由・旭童・蘭幸・一栄―(3. 子・甲吉・清生 ・小松園―(4句)与呂志・水車・どんたく (7句) きさ子・一三夫(6. (5句) 旅風・水客・花宵 句 潮花 ・李朋 ·日満

関ケ原で左から葉子・

生々庵・野迷路諸氏

に起きなければならないので、おらご起床のぼくである。八時

八時集合なら六時

こういう場合

あって、 ここで昼食、 一時半ごろに関ケ原ウオーランドに着く。 川柳陣営を休憩所の中央にしく。 腹がへってはいくさができぬと

のほうが忙しく、 」と元中将閣下が云われたが、ペンより箸 席題をやりましようや、 ついに関ケ原句会はならな 題を出してくださ

再現する人形の大立ち回わり十景が坊やたち 人気の的である。 死にともないさむらいも居たろに関ケ原 豊臣と徳川がペナントを争った大決戦場を

古戦場瓜跡もなくススキ舞う 慶長のタイトルマッチ関ケ原 雨ざらし見世物になる武将たち

阿生々旅 一三夫 子

タズラである。いやカブトをぬぎました。

た。 がっていた。これは野迷路氏のお孫さんのイ ズボンのうしろのバンドに三本の紙がブラ下 高さ30m、巾4mの流れ落ちる清冽さは見だ。新緑もさることながら全山紅葉のころは 疲かれてウトウトされているのが 散 見 され 事なものであろう。 一時間四十分の車内は静かである。 養老の坂でヘトヘト老いの水汲めどもつきぬ酒ならぬ滝の ぼくなど帰宅してから気がついたのだが 一時二十分にまたバスで帰阪するのだが、 さすがに 野迷路 小

説が今なお生きているのだ。 るように、「滝の水、

流までは軽いとおもったが、なかなかどう

スは走りだす。約四十分で養老公園に着く。

ススキ舞う古戦場をあとに養老の滝へとバ

ひようたんをどのみやげ物店でも売ってい

酒と化す」の孝子の伝

養老の滝で前列左から久子 玉枝・後列左から一三夫・ 葉子・勝木のみなさん (生々庵主幹撮影)

よみうり川柳

池 田 あ

昭和四十二年七月十日発行 大阪読売新聞岡山 の評があり、 品を選者の池田あや子さんが自身でタイプ昨年の第一集に続いて四十一年度発表の作 された貴重な作品集である。秀吟には選者 め出来る句集である。 作家のよき指針としておすす 支局発行 (非売品

無器用なツルもまじって師を見舞い |掃除背中流しているみたい 柴田多 牧やする

胸厚き成人の子と墓地に立つ 揃っているのも、 などどの句にも課題吟とは思えない佳句が である。 選者の達識を物語るもの 貝原富美

若本多久志川柳句集 若本多久志著・川柳句集 中島生々庵主幹。 親ごころ子心」 老いの坂 実費四五〇円

問う巨篇

送料七〇円 B6版美本

実費二〇〇円 送料六五円

申込所

る敬老美談もあった。

望にできるところ、そこに名瀑

がある

養老山の中腹にある養老公園は濃尾平野が

落伍寸前というところである。

お持ちものを」

と葉子さんが強力す

しまった。いくらお若く見えても阿茶女史も くことのきらいなばくなど初っぱなに参って して山道は幼児向きコースではなかった。歩

川柳塔社あて

題

ない、然しそうなるところにこの人の環境がない、然しそうなるところにこの人の環境がな資本家の考えそうな手である、確かに現代世相の一端は突いている。②これはまた現代離れの一端は突いている。③三時に銀行の窓口は閉されるが、預金ならまだ裏口からでも入れて具れるが、預金ならまだ裏口からでも入れて具れるが、預金ならまだ裏口からでも入れて出れたりが楽しいではえた時間である、説みっぷ東は即ちいつでもええ時間である、説みっぷりが楽した何として頂く佳句。④時間励行を称え出した何として頂く佳句。④時間励行を称え出した何として頂く佳句。④時間励行を称え出した肝心の幹事がまだ姿を現さない、一面は実いているが詠み古されたことで損。⑤平素といる機会もでは単無精な人でも恋すればこそ筆取る機会もするとの人の環境がない、然しそうなるところにこの人の環境がない、然しそうなる面白い見方。 多は突しし判貪がり東余ののあな く筆いたたの欲、がは生し一りい

きっちり惚れてる方は

この欄を受持って以来、思って居ることであるが、その総べての人ではないが、いくらあるが、その総べての人ではないが、いくらあるが、その総べての人ではないがある、柳歴の古い経験の豊かな大きで表しているのだ、光って四五日目にはもう投句されると思えるような筆蹟であたふたととは自治あちゃんの約束いつでもえて、謙虚が何処にあるのか、句も子供同様、生み放った。おく眺め至らぬところはないがもっと手許に置いて、よく眺め至らぬところはないか、不具なところは無いかと、手塩に掛けてはもう投句される方と思えるような筆蹟であたふたと投句される方と思えるが何をあわてて一カ月も一カ月半もれてら投気がであるが何をあわてて一カ月も一カ月半もれたらないでは困ります、よく一考してみて下さい。時間気にしてデイト落ち附けず 千 夏ばあちゃんの約束いつでもええ時間 露声上時です預金ばかりの窓となり 正 直手をとる時間が多くなるも恋 他 世間を同じていてはデイトの楽しみも

直して来たので一応帰っていった、いきれなが枕辺に寄る、あと何時間の命時間まで計っていたに持ちなおし三十分だけとチャネル離れないりあまりに常套的で感興がない、とはもう古い。②自己の迂濶さを棚に上はもう古い。③自己の迂濶さを棚に上はもう古い。③自己の迂濶さを棚に上はもう古い。④自己の迂濶さを棚に上はもう古い。④自己の迂濶さを棚に上はもう古い。③自己の正規な時間へ腹が立ち

直皆腹は

にならばな さに記チの

-46

のであろう、一面はよく表現されている。② 上五が面白い信頼し切った俗人のであろう、一面はよく表現されている。。③上五が面白い信頼し切った俗人のであろう、一面はよく表現されている。哀れな人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて居ることを知らない人達は御互いに試されて旧る。②上五が面白い信頼し切った俗人のであろう、一面はよく表現されている。② 辺いて随て計の計句る顔分いを心が

一年生時間厳守も言う通り 清泉 お時間ですと銀行門を閉じいさかいも時間をおけば笑いあえ にいさかいも時間をおけば笑いあえ 前掲正直氏の句参考にされたい。③吸殻を蹴割してけん名のであろう。②あまりにも正直感謝しているのであろう。③あまりにも正直感謝しているのであろう。③あまりにも正直感謝したりであるにな懣が現われている。④千梢氏の句と同巧ながら前掲の句にやや一日の長を認める参照されたい。⑤夜更けのステレオ案外ある参照されたい。⑥夜更けのステレオ案外ある参照されたい。⑥夜更けのステレオ案外ある参照されたい。⑥夜更けのステレオ案外が嬉しい。

など、まま渡さねばならぬ月給袋、会すまでの時間が僕のものとはサラ、までの時間が僕のものとはサラ、までの時間が僕のものとはサラ、など、までの時間が僕のものとはサラ、などの赤ちゃんに又って鋭角を突き附けて、

は授乳時 る慣 ルと 此詠 の同保弘悦白 を を を のの 大実子汀 育児法で n

休憩を宣し謀らにやならぬこと 銭金で身を引く恋じゃありません

沂

詠

大洲市

米

沢

暁

明

地鎮祭ここからお米もう出来ず つかまされきようおとなしい総会屋

道にも続く式を挙 和歌山

秋

宏

方

ので泣いても貰えぬと得心して遠慮しているこうした赤ン坊も太って来たというのであるこうした赤ン坊も太って来たというのであるこうした赤ン坊も太って来たというのである手間賃になるかと飛附いたらやはり何かとひ手間賃になるかと飛附いたらやはり何かとひ手間賃になるかと飛附いたらやはり何かとひきが背景になっている生活環境からこの句のだが背景になったのが馬鹿気に安い少しよいら手味も窺える社会の断層に喘ぐ世話の一コマだが背景になったいる生活環境からこの句のとい前掲加代氏の句により深味を見出すよう。

大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号2先 題「一握り」
・ハの寝る時間を猫の派手な声・小人の寝る時間を猫の派手な声・小

光る髪澄む眼玉肌不老門 血を浄め酸化を防ぐ不老門 今朝も亦堅き息子をなだめ 八十も二十に返す不老門 病知らずに 過ごさす 玄 老門 け 净 強血精 若返

発売元 全国くこ普及会 くこ粉末

門六〇瓦

五〇四五〇五〇

五円円

電話鳥取二二 電話鳥取二三

1

局 六八〇

第百九十六回 (復活第一回

修身が復活したらと思う日々

大 阪 継之助

勲章も復活軍歌も流れとり

大 復 萬 111 柳

入選発表

入 投 選 選 者 五四 清 百二 一十四句

九 句

停車駅復活町がもめ始め 阪 爽 鉄 鉄 児 舟

自然林復活有刺線めぐらして 洋館になって老舗が復活し 大 阪 生:

補助金の復活議員土産にし

見込まれて傾きかけた家を継ぐ

大阪

あいき

楽

復活す茨の道を覚悟して

復活へスチールデスク冷たすぎ 観光のおかげ復活した祭 仙台 道

草

パトロンをかえて復活する酒場 復活ヘライバルさりげなく握手 羽曳野 IF. 朗

女への復活ミニも茶を習い 大阪 水

復活祭ステントグラスの陽の温み 花輪重なり合うてパチンコ屋を復活す 長 鳥取日 崎 復活を喜ぶ中へ義理も寄り

カ

ムバック厳しい過去は口にせず

復活に馴染の客が馳せ参じ

知る人ぞ知る復活の裏ばなし

大 阪 没食子

復活のラインへ並ぶ僕の顔

倉敷 里

風

大火後の市街はビルで復活し

鳥取

礎

山

復活へまた持ってきた幹事役

夫

剝製になって次代に尊ばれ

赤線の復活ホテル街となり 舟

岸和田

香川酔

復活はしたが端役に甘んじる 復活をさせてじわじわ取るつもり 復活へ村の古老も引き出され

店

復活を重役会議また押え 紀元節反対していたのも休み 素身郎

復活へ昔話の花が咲き もう一度こころの支え取り戻し 折を見て復活させるとそれっ切り 佑

復活の目鼻がついて髭をそり 人間復活務所より悪い宿に寝る

三度目の正直ですと店を褒め

秋

復活を毬のはずみのよう見られ 引揚げた日を復活として生きる 拾う神あって社運を立直し 倉吉 朗 女

> あの頃が目によみがえる枯すすき 年甲斐もなくよみがえる血に慌て

復活を狙う地盤で金をまき 会長を復活させた社のピンチ 復活を期待社長を子にゆずり 大田 軒太楼 人

復活に待ってましたの声がする 復活を誓った肩に掌が置かれ

廻り道した復活で筋が入り あたたかい眼に復活は支えられ 復活ときまり損得もう云わず

債権は切捨て別会社で復活し

良い安い 買いよい 店

平 住 阿倍野店 営業所 店 店 店 店 crcdit system

復活の職場に何かズレを知り

西 宫 多久志

乃木さんの遺墨を床にかけ直し

月

大阪市阿倍野区帝塚山1-1-21 電話 -623-1151~3

月賦百貨店 本

48

復活かそうかまった 佳 何 ピー 米 ル 子 3 Ŧ

復活 職を得て亭主の威厳復活し 復活どころか二軍からも消え 出直す気もうやとなにもなれぬ齢 ののれんを弟子に支えら 富田林 高 阪 阪 槻 岡 好 東 ń 馬 郎 彦

i ドに出され復活し 人ノ句 地ノ 何 東大阪 た選手

ノク句 岡 d 十九平 復活と決し頼母子講を掛け

戻り奴声が復活し 宝 塚 ゆきを

転が 大萬ベストテン(十月現在) 逆の復活にはあらず

六五四三二 ゆきを 清 同点の場合は投句先着順 九平 代 馬 四 Ħ. 0 0 0 C 東大阪 米 宝 岡 塚 Ш 子 槻

五

阪

个雲楼 代 軒弘秋庸

十四 十八 十六 十五 忠 弘滋吸 好 東 道雀江秋楼朗女佑郎 不雲楼 春山郎 -= = = -= = = = = 7 _ _ 0 Ŧi 五 \mathcal{H} 0 0 0 0

藤井寺

阪

熨 П

富田林

締切 十一月二十日 五句以内

布

投句先 乗り気」 第四回予告 締切 十二月二十 五句以内 Ė

大阪府高石市高師浜三-五 村 郎

、毎月二十日南大阪川柳会の句会 席くださるように。 んのでぜひ南大阪川柳会へご出 この選評は誌上ではいたしませ 発表ならびに選評があります) 選者清水白柳氏により入選

看板が

本社の

中島小児科ペという看板が目印。場の近くに本社がある。写真のパ 塔社の目標は何か、とよくたずね から心斉橋筋へ出て、長堀橋駐車 車大丸百貨店とそどう百貨店の間 てこられる。地下鉄の心斉橋駅下 午前十一時ごろに小谷葉子さん 地方から来社される方が、 一時前後に不二 田が出社 JII

▼川村好郎氏、堺市民川柳大会の兼題選者ほか。 ・北川春巣氏、二十三日の大阪

の大阪文

川柳大会に柳話。

0

兼題

選者。

九

日

の堺市文化

岸和田文化祭川柳大会の兼題選者

堺市民川柳大会、

以下略

堺

取 石 岡

午後三: 午前十一時以後にしていただくとは午後二時すぎなので、ご来社は ・祭日は休み) 々庵主幹におヒマができるの

川柳大会の兼題選者ほか。 川柳大会、伊丹市文化祭、R 一川柳大会、伊丹市文化祭、R

堺市民

十月十五日の出雲

▼橘高薫風氏、十月二十二日の

奈

ゆっくりしていただける。 二賞の準優秀作の三人が集ったと ん、右が小谷葉子さんである。 ころをパチリ。 カットの写真は、吉岡美房氏が 左が前田芙巳代さ

の岸和田文化祭川柳大会に柳話。 中島生々庵主幹、 月十二日の倉敷市鷲羽川柳会 十月二十九日

2

中島小兒科

はちのへ誌上大会選者。 化の月とあって各地でも大活躍で ▼このほか、川柳塔の選者陣は文 良市白藤学園葦の会の兼題選者、

JII 柳 塔 爹

送一教册 三五円 六五円 ほか。

自家用へ鍬を積んでいく文化山一つ邪魔して文化恵は無縁老婆の煮干ほし文化にも遅れていない束ね髪性任して島に文化の灯をともし骨董を払うて文化の灯をともし骨董を払うて文化の投い建て 文化の日国技 辺日旗重洞人冷明無 文化使節と云うふれ込みで歌屋来る 文堀間房治医 16 間の智慧つみ重ね積み重ねで日国旗・ボツボツ立ちはじめた百年文明開化の語句縮めた日国旗・ボツボツ立ちはじめて、日国旗・ボツボツ立ちはじめて、日国旗・ボツボツボッカラはである。 趣にをののの 味旗静 と云う横笛を聞いてくる 火火月の大火火 出そうとしない文化村 遠い僻地の情に tha て文化の日をすごし 12 み住用の重ん化日 までたどりつき 代十恵可 仕九二朝 住 軒章藤白瑞 太 楼雅波灯枝 素弘千千身郎美代翁 弘干干誓勾正奇里干秋秋醉 可紫 二門朗童風夏女月夢

天

平

の文化ヘダンプ尻を向け

宗太郎

文

化

石 坂 新

選

ス予開日懸ひい 人親新明南 文 イッチ と婚治無 化 備けの崖 そりと 歩子が百祖 くがタ年父 校ゆがく とはこれての 丸 から 年文化せわしい暮しにし タンスの谷で寝る文化 か別れて話すのも文化 で寝る文化 ,で人間 床 文化 文化湖水の 猫 振 ~ 江戸の文化 背座 だが横 を伸た れ 通り値が上り が動 美をこわ 7 顔とは悲し 文化 す の腕を継 文化の日 かない る文 L 化 どんたく 明征 不芳章祥初鎮千雄 朗也 二仙雅月甫也代声

好 意

谷

好意を無にするな千円ねじ込まれど好意に甘えましてとあがり込み押 売の 好意 素直に 受けとれず用 の 好意 素直に 受けとれず 雄庸勝魚 声佑江山

知らぬ青年荷物を持ってくれ

好意もち過ぎ金が要り

奇酔ろ秋保古

童夢亭女夫方

意

を隣り売りにくる

受けられぬ好意この世の義理"泣く行き過ぎの好意偽善じみてくる

好ご押店

奥さんの好意を誤解して受ける 要友の好意けとばすように言い 好意だけもらっておくと突返し 好意だけもらっておくと突返し 好意が友の好意の廻り椅子 がをの好意を受けぬへそまがり 好意の押し売り見合写真を並べる が高の好意と知らず窓すすむ は出の好意と知らず窓すすむ よんどころなくした。好意・受きぬる よんどころなくした。好意・受きのます。 これしきを遠路わざわざきた好意 世話やきが好意押し売りして帰 3 過 ぎの好意もあって旅楽し 切 頂代祥素い千旭恵季恵 留仕 身さ 子男月郎夢翁峰子賛朗 十露暁利可 九平 声明美住子

文化人とは男女を転化させて行き

七面

Ш

旭不

が

満たりてこれがこのまま文化です

直 原 玉 青 著

価創

円版

g

元

俳 本社でも取次ぎいたします。 画 画 の描き方 二社 千出

50

好落旅 しもの見やすい場所に置きかる が好意 0 好 されて善人むっとする 意 のビール辞退させ 縁で知己となり 天 七千双 人面山 夏楽 再 ブ ブ ブ 1 会を約 ローチの D 1 チを替えB

好意がもつ一歩進んだ霧の路好意ではなかった打算の袖の下いつの間か減るもの好意で貸を傘いて発つ上野警察の好意受けて二人で旅にたち タートは好意結局式をあげ どんたく 暁 明

せっかくの好意をバイクに乗って事故 意に 甘えて見ようか未亡人 秀 光 峰 道

愛の巣へ邪魔な好意が集ってくる 名を告げず去りゆく好意に手き合す 英

詩

ブローチはずしてラッシュの人となり

どんたく

口

新 111 博 也 選

ブロー

お揃いのブローチ同性愛かと言い ケロイドをかくすブローチ地味にする 目じるしのブローチ出迎えすぐから ブローチをつけながらパパス留守番願います 恵季勝 朗生子子

ブ

п

藤宗遊波郎仙 はじらい。指ブローチをもてあそび 満員車またブローチをひきちぎり ブローチが胸をくすぐる嬉しい日 壇上の女史ブローチもよく似合い ブローチも胸で笑っているデート 思い出のあるブローチが錆びかかり ブローチだけの記憶であいさつし 偽 ハイミすかかくすブローチ派手に れぬ鼓動ブローチ聞いている チにダイヤが光る女史とき チへ悲しみ多き夜を稼ぎ すブローチつけてくれ 位置をデイトが替えてする 頂七百 石 石 石 八 代 す庸千里暁秋無 芳鎮 き佑翁風明女聖仙也

して選ばせていただいた。

(新川博也)

投句に対しては一生けんめい、再三検討

幸福ですとブローチにうなずかれ ブローチがつつましやかな低い鼻 プレゼントされたブローチら落し ブローチをはずせば母に見えてくる ブローチをはずして相談所を訪ね ブローチの今日は婦長の顔でなし で見た先生ブローチ光ってた ーチを毎日替えて女史若し 十九平 同 同 可 光住峯

ブロ

階段で同んなじブローチが出合い 赤い羽根今日はブロー チの真珠が落ちるほど踊り チも持って来させた退院日 チが替り恋人気をまわし チなしとする 宗太郎 章甦弘 どんたく 雅光実

> をいただいた。 ★ネックレスでも指輪でも差しつかえな ーチが胸の高さを意識させ

選者勉強に大わらわ。 子にブローチに関する話をたずねるやら、 で女性百科辞典を調べるやら、会社の女の 課題がブローチなどと、とんでもない題

☆柳 望 ☆



西日本川柳大会に大阪から出席した左から

好郎・歳風・多久志・白穂諸氏

(橘高薫風担当)

月故五敷 午句 催か会は 兼尼十 社▼日行▼に「泉紋▼社ふ六封椿 川残言池太三共あう目と、 川本山は柳川は柳川の碑東で、と一、1 は北北大月土 で泉と注 白に国が

川昭句美 川三和は・ 柳司通百雲 塔宛り円・

回上発回社 岩吟行西発

髪建新

数品午日教柳二

にの・七ほた丸のあ甫 つお清面ど本善おな先屋れるい馴子山のにで報た生屋で染の・句の求らのか市 一の皆文でりめせ句ら同

学備を進めて、(出雲市同人 句大九若た七敷 碑会月本 市市 曆司 対帰日久 幡の いの人 面途弓志 里観

いよう遠い布哇の空から祈し、 とと存じます。被害のなし、日本の皆様で心配の一ス、日本の皆様で心配の一ス、日本の皆様で心配の一名、日本の皆様が心配の 事も重なり嬉し っております げています」 上田紅溪氏 ら嬉しい悲鳴をあ ュ同

おいら滝は本坊で 眺めといから滝は本坊で 眺めといから滝は本坊で 眺めと

店ホールで開催。題・最高 とり・鈴波。みのる・暁 なとり・鈴波。みのる・暁 おとり・鈴波。みのる・暁 おとり・鈴波。みのる・暁 が。二日がかり・義博。素 外・右近。席題四題特別課 がのみ百円発表誌呈 整絡先、東京都文京区千石 連絡先、東京都文京区千石 級・大郎・大郎・ ・最庫

在である。 小島 「歓談。川柳ささやまは健力、一三夫、葉子さんられ、一三夫、葉子さんらい」は十月六日来社。主幹が日本社の主幹が出版。

司会内藤きさ子、挨拶高橋司会内藤きさ子、挨拶高橋の市民川柳大会が十月二十回市民川柳大会が十月二十

と愛犬を訪問、

もし

楽しく交歓された。

寺黒▼

風

男とで

▼山田季賛氏 氏選など川柳 主幹、兼題

(高 一日松坂屋高槻市同 川柳塔社の諸氏が題「鶴」川村好郎。柳話中島生々庵

ワール展を見学「ものはつで開催の広島原爆展とルノ人)は九月二十一日松坂屋

も見て帰り」

また

▼阿部佐保蘭氏(東京都)▼阿部佐保蘭氏(東京都)

▼奥谷弘朗氏 (倉吉市 同 ▼奥谷弘朗氏 (倉吉市 同

れる。

二回川柳文化賞贈呈式を十 一回川柳文化賞贈呈式を十 一回川柳文化賞贈呈式を十 一回川柳文化賞贈呈式を十 一回川柳文化賞贈呈式を十 大院中とのことで、路郎先 を放松江梅里氏の百日祭へ 生々庵主幹も出席された。 一生々庵主幹も出席された。 類郎氏を訪問、三日に中島 受犬を訪問、三日に中島 日夜は石曽根民郎氏夫妻 日では石曽根民郎氏夫妻

JII 社 理

高本

も真剣そのものである。 十月四日午後六時 八日は 昼の部 から常任理事会が本社で ″同人総会 変の部 それぞれポジション担当者 二席にはミニ "句会" カッ 開

ちから好みの一句と、受賞句を生々庵主幹が色紙 中川滋雀氏 に麗筆をふるわれた。なお賞状はことしから同人 を贈り、双方の各入賞者がえらんだ路郎百句のう 出席 二賞の準優秀作各一 多久志・文秋・栞・古方・小松園・ (書家)にお願いすることになった。 席、 形水

内NHK教養課。 月は近江砂人選。 第二放送で、 人に川柳をすすめるもので、 BK川柳復活 好郎・生々庵・一三夫諸氏。 課題 十一月二十六日朝七時にNHK 締切は毎月十五日か。 毎月第四日曜日に発表。 「めがね」中島生々庵選。 宛先きは大阪中央局 初歩の

▼生々庵主幹は十月二十二日の同ラジオで二十分

酒米と宮水の傑作





金露酒造酿

當 表

月 H 時 白

四十二年度の同人総会もなごやかにおわって休憩後、六時から二賞表彰をかねた十月句会の幕あきである。
まず生々庵主幹の柳話。スペースがなく残念だが、お得意の小人で行く自然界の動物にまで目を向けられた。自分で環境を作り自分の力で道を開いて行く自然界の動物にまで目を向けられた。自分で環境を作り自分の力で道を開いて、自分で環境を作り自分の力で道を開いて、自分で環境を作り自分の力で道を開いた。自分で環境を作り自分の力で道を開いて、自分で環境を作り自分の力で道を開いた。自分で環境を作り自分の力で道を開いた。主幹の柳話にひきつづき、いよいよった。主幹の柳話にひきつづき、いよいよった。主幹の柳氏、つづいて名花二輪、準優秀作の「活気あふれる十月句会の月間賞は新鋭新谷笑痴氏の秀句にかがやき九時三十分に閉会。(河井庸佑整理)出席―与呂志・好郎・葛城・一三夫・操子・学痴・水客・瓢太・多久志・春巣・白溪子・文秋・梅志・たつみ・凡九郎・誓二・柳志・行荘・恒明

生・方・仙季・ ・眉・芙・賛奈 葉水富已吸・良 • 久代江良子 千一 · 遊天 · 作・遊人 ・喜仙笑不女 喜正・一朽・ ・静阿・小 遊・・・・郎・一野摩県・

題 " 遊

最ビナトトニ信あ松トトト業マトト振 弓生痴古恒き恒千き生水水不白与双千 々 なった。 彦庵亭方明子明梢子庵客客朽子志楽梢

> 一言を大事にトップしまっときトップの座守りや家庭が守られずトップがら列が崩れた駅の朝トップから列が崩れた駅の朝トップから列が崩れた駅の朝トップから列が崩れた駅の朝トップから列が崩れた駅の朝いさめるようなトップはしらぬ女の子・ップはしらぬ女の子・ップの座守りや家庭が守られずれった。 一ト発流眼トトそトス

多 志

選

成へすこしもらった手も挙がり男と判って縁談鈍り出し男と判って縁談鈍り出したに替成してしまいをところが痛まへんからないまんま替成してしまいなだからないまる賛成してもなのがっているがを見って賛成をして肩書に寄付が要りくらみのある賛成とつゆ知らずが要らんのなら賛成したを告れずが要らんのなら賛成したをときがか要らんのなら賛成したをときがか要らんのなら賛成したをときがか要らんのなら賛成したをときがか要らんのなら賛成したをときがか要らんのなら賛成したをときがか要らんのなら賛成したをときがあると言う賛成へためらわずがをいるのも可いです。

賛賛黙前我金パ賛不人打何多た不賛賛好ふ見わ長替

成成つおががイ成承格ちご数く本成成きと送か男成

た一梅文不滋梅小一文 たっぱくない。 松三 み舟志秋朽雀志園夫秋 0

五舞久久久久久夕久マま久久久満前久久一久久久久眼バ 年鶴しししししク L しししと 前でぶ振ぶ振ぶ あ別りりりりりをりでとりりラ場てりりま りりり の所に住んで久しぶりの所に住んで久しぶりり水に流せぬのも女りって何を言うたからしまり相手ばかりがふけてみたまで来たのでという人と言いを思うととでったが名を忘れてずりを表うけて降りる大ば雨になりりが歌で久しぶり目で語いのたまですべ気しがりと言う誘惑にわなが名を忘れてずりをよろけて降りる人とがり目で語ののたまですべ気しがりりと言う誘惑にわなが名を忘れりから表がして来た久しぶりりをうたない。事おまへんかりをうたない。事おまへんかりをうたという。 0 多た狂笑静小白き梅文笑柳き滋与旅葛舟形操一好好阿吸 久つ 松溪さ 呂 三 志み二痴歩園子子志秋風志子雀志風城遊水子夫郎郎茶江

賛賛賛賛えお賛 成成成成成成ら手成 をのすがのい盛と せ数る出起かる金のではあるという。 るもだ 笠寄打ら なるだけ 意はつ場笠成方に 地があり出されたされる音またされる音またされる。 田 久 りずいぎりいしれ 米 柳好あ好多恒一吸 雄 42 久 選 志郎き郎志明夫江

操 子

選

久久学改久久好旧 し歴れし し振り し振りの 対し がり かり を しい と こうてい か と こうてい か と こうてい か と しい と で か な い た 必 な か い た 必 な か い た し に じたみし相めは戻 風で向き 気しぶり 気しぶり 気しぶり 気しぶり 気しぶり

久笑恒滋葛不白白

雄痴明雀城朽子子

まけ 夜ちの眼 と秋しとすずずそのうの窓によなれる。 り女いうりずり出けす秋み山きり秋 文弥静あき吸笑静柳形天阿静笑葉杜 一ア 日軒正頂花千旅

校芸ひ東秋葉御秋公蛇冷衿食ふ倖扇秋枚秋碁秋何老む起

太 留 キ 太 留 秋生波き子江痴波志水笑茶馬風子的栄ラ満楼朗子村梢風

数ど数ね数数数

学っ学じ学学学 ちっ ちっ 鉢のはが たに自巻弱ど 土 れ似信でさて I ててを組がま 主ももむ決でに 婦数ご数め進む の学た学たむ要

藤 りいい夜道恵日 志 小恒礎千 ど喜秋 久た 石明山良 に仙月 選

湖人雑ポー年干燃虫ボ絵鹿熱食結豊お に間草ス日頃物やの1筆せ帯欲婚作湯 で 値上で 値上げ を がなを すばてサ風団し の索て てが秋地ンが地い足の今 秋たの下マせも落を秋年れ寄を寺げを 月色鉄のき秋葉進 てせするは知 へも ず冴ばな帰 かえれりるるりうず音る秋ず情りなる

操小小柳与弓白滋恒好一摩文天春与笑松 呂 溪 松 呂 溪 呂 子園石志志彦子雀明郎舟耶秋笑巣志痴

木 摩 天 郎

古

JII

柳

1

詠

ま

n

た 堺

人

Z

が郎 発誕氏序 生した。実生した。実 限 長 りない 清 · 共七十五円。 なく愛し、この安との氏の 堺っ 新谷 こ子 00 傑作天 風船の色で揉めてる子沢山いさむ風船の色で揉めてる子沢山いさむはほぺった*ふくれ風船*でのまんまあいきほほぺった*ふくれ風船*でのまんまあいきほほぺった*ふくれ風船*でのまんまあいきれい風船をもらおと背の子前に出し誓二組船をもらおとすの子前に出し誓二はほぺった*ふくれ風船*でのまんまあいきが、風船をもらおとすの子前に出し誓二人を対している風船質留子によっている風船の色で揉めてる子沢山いさむ場所をしている風船の色で揉めてる子沢山いされる風船の色で揉めてる子沢山いされる風船の色で揉めてる子沢山いさむ

梅薫双良静静弓遊眉笑金白古笑奈葛天遊旅笑言久い天 良 **さ 志風楽子歩歩彦仙水風三柳方風子城笑仙風風也雄む笑

ス界正スス コをのココ 題 ミ知記ミの がご事の花 てマ渦大ス マスをボス コ をボ 敷ココレの ヘミミンス 先かのトキックのある に向勇家ヤ北 ぎン JII 着かみぬダ きず足きル 巣 操静多花ア 久

子歩志村ラ

マ限訂ママ

和 74 十二 年 度

強 61 4 結 の 力

百 会 (第二

に二 よう要望された。 三年目の危機を説き、 る。若本多久志氏は る。若本多久志氏は イ、会の 回本 墨 二回川柳塔社同人総会式次第 黒々と式次第が書かれてある。 同人総会が自安寺で開かれた。 本年度の二賞発表十月句会に先きだ 黒同年 経過の辞 報 告理 事 口、 、より結束を強固にする 「開会の辞」のなかで、 「開会の辞」のなかで、 会計報告)役員改選 — 及員改選 — 及長選出 — 議事 及族形 — 議事 先き 会場 たって 中 央第

中島生々庵主幹は「理事長挨拶」で、ます前向きの姿勢で柳界に貢献したい決意をのべ、本誌のマンネリ化打破のため広く同人話氏から「経過報告」と「会計報告」をこまかいり「経過報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計報告」と「会計を表表して本田恵二朗、河村日満、福島鉄児、高橋操子四氏を推選した。この選考委員に生々庵、春四氏を推選した。この選考委員に生々庵、春四氏を推選した。この選考委員に共があたり、すべ、「閉会の辞」が宣せられた生々庵理事長に元常任理事、川村日満場一致で新して、と、計画、福島鉄児、高橋操子四氏を推選して、この選考委員に生々庵、春四氏を推選して、一次の長いで、「開会の辞」が宣せられたと、高橋操子四氏を推進した。と、計画、「現会の辞」が宣せられたと、「新会の辞」が宣せられたと、、「新会の辞」が宣せられたとある。

訂正

新役員
「理事長」中島生々庵「副理事長」若本多久「理事長」中島生々庵「副理事長」若本多久。「理事長」中島生々庵「副理事長」若本多久。「理事長」中島生々庵「副理事長」若本多久。「理事長」中島生々庵・小石・薫風・精本緑雨・服部十九平・浜田久米雄・本田恵二朗「常任理事」大坂形水・金井文秋・河相すゝむ・河井庸佑・菊田いさむ・菊沢小河相すゝむ・河井庸佑・菊田いさむ・菊沢小河相すゝむ・河井庸佑・菊田いさむ・菊沢小河井庸佑・菊田いさむ・菊沢小村園・橘高薫風・清水白柳・傍島静馬・戸田古方・西尾栞・西田柳宏子・不二田一三夫・正本水客諸氏(太字は新役員)
・全々庵・小石・薫風・静馬・没食子・笑痴・全々庵・小石・薫風・静馬・没食子・笑痴・本不二田一三夫・文秋・梅志・たつみ・凡九郎・誓二・柳志・奈良子・メケ・摩天郎・多蘭子・小松園・一三夫・久米雄・白柳・季替諸氏。
「理事長」若本多久「理事長」若本多久「理事長」若本多久「理事長」若本多久 カ月号332 は

柳 塔 社 百 総 参 加

人一句 (60字以内の小文をゼヒ書いてください)

れる句をどなたも一句や二句は持っている。そこで同人全員がそのうちの上品でユー に富む ま川柳で忘れら 年号を飾る 一句を新年号に発表していただきたいのです。 れて いるも 0 は ユーモアである。雑詠や句会で発表したユーモアにあふ 十一月二十五日着 用 紙 は 原 稿 用 E 紙 便

ります。 年号をもう

度で覧ねがって、

書式をお守りください

0

原稿は編集上二十五日着便で締

黄銅六角ボ I ル トナ "

及

U 特

殊

換

物

全

般

螺子製作所

TEL 大阪市天王寺区空堀町八番 夜間 (762) (761) DO 五 24 C 四 地 1

P

8

玩

具みなこわ

近

詠 今 治 市

長 野 文

庫

流行と云うのはつまり人の真似 狂い咲き三日天下であった歌手 当り前だよと他人の所得税

名古屋市 長谷 JII 鮮 Щ

唐辛子の

色が秋の湯はね返す

以来三猿主義で通す僕

次々と代理が続くからねむり 道草も食えつつ金今日も旅 旅先のふところノレンの格を見る これしきの旅に老妻嬉しがり 新婚の無事は旅先から電話

続くヤッパリ恋しい天気の日

名を秘して施設の慰問

が続けられ

前列左から二人目多可志・四人目茗人・八歩・日満 明朗 · - 1 おいて一保・中列左から二人目瑞枝・二人おいて千代・花子・右 端新雪・後列左から三人目三歩・右端独歩・隣りが布堂の諸氏

柳大会 石

坂

新

たてつめてクーラー 会には川柳塔社の同人諸氏が中心でし 作家が多いのが目立ちます。 柳話は河村日満氏。 ホー ルで つけたと噂され 太字は軸吟。 開催された米子 川柳 嘉津枝 た。 女大

冷房が足元すくうように効き

H 校子

手遅れのもう妙薬に見はなされ妙薬を二伸に書いた見舞状 売出しをかき分け祖母はまだ達者 若返る其の妙薬にだまされる 緩慢な効き目で妙薬親しまれ 売出しの特価に妻の目が光り 賽銭も金魚にかえて子は帰り ツッカケでぶらり出て見る夏 夏祭りすぐ汗になる紅を刷き クーラーを弱めて昼寝の子をねかし

瑞蒼新一新千定吾瑞布無茂三吾近茂瑞花 枝水雪保雪代人柳枝堂閑人歩柳志人枝子

ま

17

妻の座の誇りは胸の奥で妬 貧しさに耐えて誇りを身につける 建増しのプランへ妻の知恵も入れ 里の母くらしの知恵を置いて去に 泣いて呼ぶ知恵をゆり籠もう使い 運動会知恵のたらぬがよく走り新婚のしあわせ続く靴の音 3

若き日の誇りは鼻にぶら下り

清純の誇り静かに待つ婚期

だしじゃこの 味 田

水

だしじゃこ、の味に出会うことがすくなくな 々煮ものに用いてこそ効果があるのだが、そまいものではない、化学調味料にしても、少 まい味の出る、じゃこもそのままで喰べると こなどで煮出すのがこつらしい、そんなにう あると言う、その味も昔ながらの、だしじゃ ままでなめてみても刺戟が強いば たようである。 の中でモシャモシャするばかりで一向にう いものではない 近頃化学調味料のはんらんで、 板前さんの腕は汁の味付に かりでう

私は川柳を、 板前の腕の見せ所とあれば心して料 じゃこも板前のよしあしによるように 味であると思うている、 たしかに庶民性に於てまさに、だしじ だしじゃこと申すつもりはな 日本的な味を

八明千華茗千日無明 步朗代宝人代满閑朗 灯マ幸お税市 ネ福転務場 玉 キャン腹を な婆署ま JII のとで 腹大知行ときらく 宇 きらく てらずいまながある。 吟 きお新に に孤独ない。最初な妊婦の世界の妊婦の妊婦の妊婦の妊婦の 出腹築作 身服服服き服 原 秋月 博秋胡竜一久 * 友月風泉声雄 報

書式は発表誌のように。

61

ŧ

JII

出

雲

市

Ш

健

太

郎

を す

のぶどうが 過信を

0

3 13

盆出盆盆ハ

クを酒

太仙郎久紅朋南

切

は25

H

着便。

失シぶ溺ぶ失マ霊気冷内実自行 アと恋ス前休房心力 製

緑紅祥湖泥紫晃昭独健稔朱李河

しうのカのめがののの

ぶどうつがいてはいるがになったないのようにないのようにない

原 稿用 紙 12 ~ > 書 きつ 文字は楷 締

JII Ш 原 秋 月 報

灯籠りとことの 龍り言れ 満の言花を JII 鑑ずみれた生活 が愁仏の で舟をいる。 ばっちくいす 出 目賀芳月 りいる 照久三文胡 米 路雄六平風

産新海美へ男島へフ ら水くりで燃り しボ ボ L 0 \$ 客に ジ 女 島 1 1 中去り もとれる でも良い 本平線に 水平線に t 1 平会運 ひしめ 線汚り いくヘリボー・人気兼なで眠りるくヘリボー・人気兼ながおき 追突事故がおき 追突事故がおき おかい 妊婦 服長 い 妊婦 服 に 陽は 沈み ト雲かりき服みけ 哲太柳夏容笛哲佐照 五 加 三郎郎 峰生郎恵路

ベ押スシ優優槍楯楯楯大ぐ子 指力 先 か売ダ ャ勝勝とも受をぼ 1 K 大 りレッののななけ手らと ひトに P 阪 が越タ楯楯りくたにを楯い JII を知 とを楯素気天ふ受つ を苦しし 感に いけるけかけ 言笑裸にカふと手持 下 ってな思勝プえなの な思勝プえなのか 0 は じるペー 親 1 がら腰 がら腰な持が がらかなり 一ジョ をがと でするりもなりせいない 繰れ す世直しし 金井 文秋 好滋 伊水三一竜浄飴胡幸芳柳正秋 久 野仙六声泉美坊風仙月子州月 報 郎雀

0

0

死に

助雨月楽子

ま婦い揃 い事 行所によ して別 ある残 りれ籠暑

あ美貞尚野風金文鬼古双季 き房山二菜洞三秋遊方楽賛

はれ陽にマトトが一とちったがの子動 玉 法の甘さが口惜しい柳の日動けばスリにされそうない。トトは知りつとうたが流儀に会うたお茶を立てに見えてる三毛のシルエットがありはば動くみんなの眼が動けば動くみんなの眼が動けばありて見えてる三毛のシルエットがありばするとが流儀に会うたお茶を立てに見えてる三毛のシルエットがあけば動くみんなの眼が動けばスリにされそうない。トトは知りつくしてる旦那様に知りつくしてる旦那様である。とが流儀に会うたお茶を立てに見えてる三毛のシルエットがあけばありるとあっちゃな指を折って出しる。 がガに 造 JII からつくしてる旦那なりつくしてる旦那な指を折って、 슾 言な 3 シ俗シしわら 市 ーッせる 出 芙章静七形喜季恒白県一金弓吸古文双一凡静柳 已

已 代雅歩郎水仙賛明柳郎舟三彦江方秋楽栄郎馬子

歯総お色人言色赤胡銅サ を入眼眼情い眼ち散像と 母気の苦眼鏡がだ見かる苦麗の苦麗の苦います。 面労な鏡拭ませ眼据く 輪なりないにするにいてまいてもりにいてまる。 エカ紅雪万暁あ浅快笑三 スロ 里 き 夢 子女溪女歩舟坊太起有石

さになえのけ里し水

らは奴市席ははての

しくに不と電ダ惚大もつ

またい友まくはて道知でががのですなよきっ

に無事に生* がへず温みがいところ で逃げずず がれとらずず ないところ

年茶我季誓本一鉄凡春緑

起ブ型ブ店乱へ きラ 紙ラ仕売ル をウ舞のメ " しで並スと原 に行べの書価ひ おるよりであるよりであるよりであるよりではかけ声の いっスゆはない るたらるだれまだい 子

句 ワ 快夢 瓢幸好起きた さけ 人代郎人子し 起 つらぎ

ı

毒弱と相あ雀通口ふ引井 怪傷怪ぬ我商人 獣つ獣いが魂間 と手んさ夜だる越戸 いた怪獣もいるないなるが火を噴き坊やのくずすセットはいぐるみ着で怪獣ママゴンが家に怪獣ママゴンが家に怪獣ママゴンがないをといるないないないがないないないないないないないないないないないないないないない 大阪市) やの股くぐ! やの股くぐ! なまもちゃいは 高くつ! り箱きトり 甘良竹草愛夏没

書で書いてください。 式は本誌発表のように 禍は月末着便まで。 月 0 句 編集

愛いクさ子蟻泣引暴脱やや岩

三凡形柳静六中一一章綾静天

九 宏 竜性 善郎水子馬子尼舟栄雅女歩樹

総入ま妻食

入歯だ楊卓

違あなを

のうりは思

憎妻歯はいり い楊し落出

顔枝てちし

浮拝泉柳紅

草山女葉茶

逓

信

森下

食

子夫荘右論生子

捨枝に

て要っ

ららい

て等の上抜落税りり壁

所題時 玉造 仕中草、日 JII 会

玉造交差点南一〇〇× 仕草、回転、ピアノ 大阪信用 米

所 題時 金井文秋堂近く 近生柳く野発 絆午 乗町表 願一 •後 い六 ざ時

安泰へ足で踏張る倦怠期安泰へ足で踏張る倦怠期安泰の筈が安泰そうにあぐらかき妻も子も居て安泰な僕の城連球の角度を変えて近れて最りにしていたと仲居の人しぶり下りバイのたたぬ浮気の中とれて撮りではならと云えず乙女は動悸させならと云えず乙女は動悸させさようならお国なまりが出てしまいさよならをしてから拭いていた涙や生が生徒恐れる世とはなりなようなられると云えず乙女は動悸させさようならなるところでしないとが出てしまいさようならと云えず乙女は動悸させさようならと云えず乙女は動悸させさようならをしてから拭いていた涙を歩きないと云えず乙女は動悸させさようならと云えず乙女は動悸させるようならをしてから拭いていた涙ををしてから拭いていた涙ををしてから拭いていた涙をかります。 1 1 Ш 社 JII #るき 竹松 与一の小胡松文漁茂洛藤和秀三み正楽継孤笑喜 呂 ば柳 +の 之 風

スススス 6 6 6 6 ドガドド を出をの 出さぬから飛りませしまれ 美伸み文 知 り子

- 60

6) な U

> 弓彦 磹

っちゃけばなし

ニリー卵の道を知った。確は「いなびかり」「雷」 三十八年八月に名付け親である山本素郎氏の誘いに特に学校の先生が困まじます」。 ち弓 と言う意である。このより川柳の道を知った とのことである。 をつがえたと言う 国でも珍ら か 0 た平安のころ一 の弦を鳴らして怨霊魔性を払うまじない 37 因縁であろう。 しく「謂 長私 ての 男として生む 私の 「大鏡」 閃の光とともに降る雷神に弩弓 意味から素郎氏は鳴弦すなわ 「出身地」 人娘 の故事を連 れ た。 井 由美」と言うの などをよく聞 市 磹と云う 想して付けた 0 の行な 誘いに 法念寺 0 昭和れ は全

節あってこそ風雪に耐える竹であってこそ風雪に耐える竹の水シット旗振るだけで着けておりかに似た気性を買って抜てきし歩からのネクタイーべんだけ締める動揺をしてる社員を捨てて逃げ切り机を出され動揺する弱味ネクタイにお上りさんと言うむすびなりないにお上りでんと言うむすび

理りした保険 場が馬鹿になり 見って抜てきし なんだけ締める であれており はで着けており

好弓百ゆ素ゆ弓慶素 き き 之 郎彦酒を郎を彦助郎

ができてか ができてか かできてか 街メ抜作妥昇素湯新恋ジ茶仲仲ス タか文協給面上築人 チの差プー ンれのすのでり にガて中る当はの で 重の また で 重の また 守り 三 予スもに弱座聞女 報井よ酔きくけレ 番に 通戸いう勤らなモ 報通りの風を見る 日の友は今日の敵 に来るない飲み仲間 に来るない話まではれる にない話まではれる にと来るないできる にに来るなが足り にに来るながにない ないが足り でも済まない飲み仲間 は用が足り でもできるお父さん でものでしている。 でものでしている。 ではれる でものでしている。 ではれる ではれる できる。 できる。 でいるが、 でい ル サイドの声が 市 pt1 枯 部 れ 柳太報 桂天松紅一夢伊香竹大雪蟠さ勝羅 津 だ 津 緑樹風雨人迎志芳荘破枝蛇子子春 米

入消切留塵信未信三お信プブ

性達保 JII 柳 会 (大阪 市 Ш 村好 郎

知お国

入れてから切手忘れたあわてよう 恵 関守番を小説もって頼みに そい にきった顔で寝ている膝の猫 にきった顔で寝ている膝の猫 を外説もって頼みに そい を小説もって頼みに そい を小説もって頼みに えい をか説もって頼みに えい をがいがお腹をどうする気 大など無いがお腹をどうする気 をがいたに返事なし がみに そいが表している膝の猫 をかいが表している膝の猫 をかいが表している膝の猫 をかいが表している膝の猫 といいが表している膝の猫 といいが表している膝の猫 といいが表している膝の猫 といいが表している膝の猫 といいが表している膝の猫 といいが表している膝の猫 者で別れ、料無駄 駄 しれ 払 いる娘和 63 i だ服 が小て 口走皆 達り達 者に者 痴静県吉 亭枝郎

文芸お暑カお読達親金生口還達チう達斗 3 面達隣 比与双草輝喜秋重雪啓生千吸弥 呂太 郎柳風遊路郎楽春成風水夫男吉長歩江生

職業 証人役場書記 (三十六歳

くたびれた部 くたびれたお

た顔気になりまたおっさん市業

出議 出した倦怠 の名刺出 の星 仰っ まるべ

に川

柳

(大阪

市

郎 報

日目ざましよりも

起 川村好

空

3

一泉扇瓢

世睦里太

61

すなろ川

柳会

市

川村好郎

れれ をかくす かう けち がり しょかい な厚 女塗 好寿 郎子

JII 市 JII 村好 RE

> 泊孫看 れの護 1 とよ婦 とは言葉な看護 I ス 葉婦告の記録 1 裏相母 Ш と手と 知らず思いい 寝下聴 大坂 るげき 形水報 好敬万

郎太里

役

養まわし紐の長さのうちの芸 が 一人を に 調子の 上る コップ 酒 四本 たどれば 危険 なワナがあり 形 一般 で 大 で 大 で 大 で 大 で が の 車 横目にクラクション ア ベックの 車 横目にクラクション で カ チョット 短い 紐 に 四 苦八苦 か の 事はもう 忘れ 度いコース選出し だ ライブに来た青空に伸びをする に 見 えぬ紐で人 生しばられる い 世 で 校 な で ナ が か せ で 大 で 大 で が ひ と 騒動 服 に 見 えぬ 紐 で 人 生しばられるり で 大 で で で 本 着 か せ の 上る コップ 酒 の と に で 本 着 か せ の と た ど れ ば 危険 な ワナが あり と に で 大 で と 解 動 で 人 生しばられる の 上る コップ 酒 猿ド酔眼紐ドコスあゴド行靴子もアネ子 芸れ酒るりるせけ酒んるしせ動苦ンえ 白豚酒孝元亜丸形博美常有一貞重一順東 柳児井夫二成山水泉露夢一扇彦広郎造勝

役自役一芸一素玄屋ほ はんとうに素人で 人の仕事と ト身代つぶ イ者今日素人 生を役得で 生を役得で は得のように は得のように 人ぶと下人 自費だよと念をおし 刺 役 得 届 け ら れ へ で な い 職 で 生 き で な い 職 で 生 き で な い 職 で 生 き で な い 職 で 生 き で な い 職 で 生 き で な い 職 で 生 き 自刺風 市 岡 千笑草遊摩青た暁流天 万 大 子痴春仙郎香お年月笑

水を緒路代園助太子正よ信を恵郎

形欲呆酔水音しいお生いぼ乳男後後 村うだ炎夕少せおせ 妻来て斜めの柱立て直しまえ選んで悪運つきまわりまえ選んで悪運つきまわりまえ選んで悪運つきまわり飲み子があって六十路をぼけられずいた振り出来が出世もしないままンサムな被が出世もしないままンサムなががまたら出来が出で行儀があちゃん。居たら出来が此っ行儀があちゃん。居たら出来が此っ行儀があちゃん。居たら出来が此っ行儀があちゃん。居たら出来が出でしまいする事うまく小金も貯めている皮肉ゆうとめが先妻ほめている皮肉ゆうとめが先妻ほめている皮肉ゆうとめが先妻ほかでしている皮肉はな事うまく小金も貯めているまして、 な JII 眉ひ多小秀育進恭宏喜み柳は祥語潔 で津 之 柳

中とし天立年みごみ駒 得 がうぬをがのしその を とけひ一誇ぐか声な 寝とにっぺりれに忘 せみだれるほして 鳴っ響れ JII 思 62 2 恭眉柳潔小美ひ点悟 で心 福 路代お坊郎 太水信 柳

62

3

士残図路か 追下でし がん満いでレ

の室のするい涙さ白たさ示来素をけ手若停

不淳鬼三曙宮淳笹久朝蘭紋伯巨菊悠勢小晏紫秋静 二...辛 米 松 無 さ松露勢南宇正尚紅清つ 松 無 二幸々峯童酔泉火園士光草 子子緑南史海太一山児紫

二眼た二二今ま二始二二二退二

の声に過去へ他といい。 を強力のでは、 を変すないでする。 を中では、 を中では、 を主に、 を明されて、 を無のののでは、 を無ののののでは、 を無ののののでは、 を無のののののでは、 を無ののののののでは、 ででいる。 でで、でいる。 でで、でいる。 でで、でいる。 でいる。 でい。 でいる。 でいる

界線によったよう! 不他人はぶれたなる。 の関連によう! の思知によう! の思知によう!

舞う海骨逢大夕旅逢妙

竹クが宿車車車 U ラま 000 子ムだ朝やつ か げ 短 生生らにれた 王に国が というに というに というに で の国義くれ 力となって済みであるる。

静天登好房当紅

水樹子児子平児

ス職合歯歯歯

本 礎 Ш

学学とく学学学だ学業学学学用学 期期歯ま期期期暑期式期 へし へだしへへ頭い遊お 元けく逢黒張机んれサ 同風するヤ郷火な扇さ るが 学梅久和朱喬恵千保民二き勲プ 長章久富千吉明富英貴 代 子子夫子朗ち

野美宏実

師のうたがかかれた扇使いかねおした。 と師は白扇を基で折り去られる お見合の扇子たんだまま置かれる 見合の扇子たんだまま置かれる お見合の扇子たんだまま置かれる お見合の扇子たんだまま置かれる お見合の扇子たんだまま置かれる お見合の扇子たんだまま置かれる お見合の扇子たんだまま置かれる お見合の扇子たんだまま置かれる お見合の扇子たんだまま置かれる あんで居る母扇ぐ娘の手が止まず と師は 白扇を墨で染めたがない。 師子病淡師お白舞愛送お骨充不耳う P 行目 礎佳征鎮和珂忠一加広政秀長勇総虚

山女也也久女志代代司子峰平仁

高級洋菓子 TEL(2)2334 堺市役所前

IE. 63

募

集 •

柳

10

句 句

好

郎 廊 强

JII

柳

塔 樽

10

中

島

生々

近作

課 題

吟

年 各題5 玉 句 內 藤

柳塔の投句は本社同人に限ります。 流 3 1 4 行 V ス 奴 谷 原 沢 原 紅 好 秋 祐 月 選 選 選

新 年 号 発 表 îì 月15日締切)

近作 JII 柳 柳 月 塔 樽 号 10 10 発 句 句 表 12月15 JII 中 村 H

生々 締切

庬

郎

選 選

課 題 吟 (各題5 句以内

難 雪 娘 題 有 森 本 法泉 淡 舟 仙

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。 字は楷書で新かなづかいにしてください 文

★用紙はなるべく柳笺をご使用ください。

2 DK.

た/を特集した。マンネリという人がいるかも知れないが、執筆陣が毎年変っているので内容は新鮮だできるだけ避けるようとのできるだけ避けるようとできるだけ避けるようにしたい。 マンネリー たい。 昭和に読む大正の雑 告受付

0 4 法が二百円

柳 三振三 三香 一六八番 社

ループをおもちの方もご利

H.

分の

一段が千円です

0

★原稿締

切

+

月末日

なたもゼヒーロ

誌なんてナンセンスですからね。 ★新春の名刺交換に一口、 はつのことで、ナンセンス等集ではありません。 大新春の名刺交換に一口、 よろしくお願いします。

三夫

会場

+

日 時

月六日

月

午後

六時

安

(妙見さん)

社

電千日前下車スグ北側

兼題

雑 声

0 ス

の題と 選者は当日発表) 道

各題

★投句だけの方は切手50円封

入

席題

五.

役 Ш 菊

> 村 田

好 67

、さむ

題

1)

島 静

電話21 1 1 白 多 478

話

馬 選

選 ★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鰻谷仲之町20 柳 JII 塔

「小 説」 「メーカー」 説」 土 12月の兼題 吉日

話 大阪 (如) 3985番

半年分 定価 年分 百二十 千四百四十円 七 百 五十 户 円 (送料六円) 妥 (送料負 料 共

和 和 pu 四 発編 T 行集 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地 人兼 年十 一年十月二十五日印刷 中 一月 島 蓬 日発行 太 郎

昭 昭

大阪市南区鰕 所 大 陽 仲之町二〇番地 印 刷 株式会社

選 選 選

印

刷

発

行

所

電話大阪・二 振器口座 JII 大阪・三三三六八番 七 -三九八五番



灘

西宮酒造

PIL

:書:酒





おがきぬかれた 難の酒 みがきぬかれた 難の酒

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理·焼餃子

豚饅



焼売

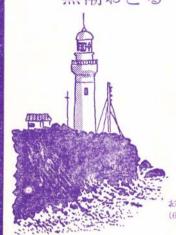
大阪なんば

◆出 張 販 売 店◆

なんば高島屋/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋 堂島地下センター・弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

黒潮おどる

紀州路へ



<白浜ゆき> なんば発時刻

急行 第2きのくに…(毎日)…12時40分発 急行 南 紀 3 号…(毎日)…16時38分発 急行 臨時しらはま…(土曜)…13時10分発

<新宮ゆき> なんば発時刻

急行 南紀 1 号…(毎日)…7時45分発 夜 行 直 通 列 車…(毎日)…22時09分発

●第2きのくに号は座席指定券を 他の列車 は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社 (641) 8686 (341) 5 38 南海電車



宮内庁御用達 菊正宗酒造株式会社 神戸・羅·御影 一番よい酒

うまい酒



清酒

.